

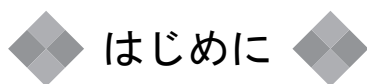
これからの聴覚障害学生支援 — 今『対話』を考える —

日本聴覚障害学生高等教育支援 シンポジウム報告書



2018年10月28日 日 会場 早稲田大学

- 主催 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan)
国立大学法人 筑波技術大学
- 共催 早稲田大学
- 協力 東京大学バリアフリー支援室／日本社会事業大学
関東聴覚障害学生サポートセンター
- 後援 文部科学省／独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO)
東京大学 障害と高等教育に関するプラットフォーム形成事業 (PHED)
京都大学 高等教育アクセシビリティプラットフォーム (HEAP)



はじめに

第 14 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 実行委員長
筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター長 佐藤正幸

いろとりどりの紅葉が映える都の西北、早稲田の杜を会場として聴覚障害学生の高等教育支援に携わる 476 名の方々が集い、第 14 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムが開催されました。

今回のシンポジウムは、「これからの聴覚障害学生支援—今「対話」を考える—」を主題として、前日特別企画では、当事者研究、視点を対話でつなぐこと、支援体制の整備、シンポジウムでは、実践事例コンテスト、支援実践発表、支援者養成の先駆的取組などのセミナー、そして全体会企画の『『対話』がみちびく質の高い支援—聴覚障害学生支援のスタンダードを探る—』においては、今後の聴覚障害学生、支援者との対話について、支援体制のあり方について熱心な議論が交わされました。

プログラムの中には、所属が異なる聴覚障害学生、支援学生、支援担当教職員がグループとなって、お互いに支援のあり方・支援体制の構築などについて討論がなされる場面があり、普段の生活ではなされることのない体験をし、参加された方々それぞれに得るものがあったと思います。

全体会企画では、聴覚障害学生が意思表示をし、合理的配慮の提供に至るまでの対話について丁寧に議論がなされ、私個人としては対話にあたって支援する側は聴覚障害学生が如何に自分の困っていることを躊躇することなく表明できるかにおける言葉かけ及び雰囲気作りに配慮が必要である、また、その建設的な合理的配慮における合意形成に向けた建設的な対話を行うことによって、聴覚障害学生自身も情報保障等必要な支援を構築する力に繋がると考えました。

この度、本シンポジウムで得られた知見、議論の成果をそれぞれの場所で活かして頂きたく、ここに報告書を作成しました。是非、お手元において必要に応じてご活用頂ければ幸甚に存じます。

本シンポジウムの開催及び報告書の作成にあたりましては、共催校である早稲田大学の皆様を始め、企画コーディネーター、講師としてご尽力頂きました皆様、PEPNet・Japan 正会員大学・機関の皆様、通訳者など関係者の皆様には大変多くのお力添えを頂きました。また、本シンポジウムにご参加頂きました皆様にも開催、進行にご協力頂きました。

厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

もくじ

1. 開催要項	2
2. プログラムおよび前日特別企画概要	4
3. シンポジウム企画報告	
1) 聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2018	10
2) 教職員による聴覚障害学生支援実践発表 2018	13
3) 関連団体活動紹介	15
4) 情報保障支援者の養成に関する先駆的な取り組み—当事者が支援者になること— (ショートセミナー 1)	16
5) 基礎講座 建設的対話から始まる障害学生支援—合理的配慮の基本とは?— (ショートセミナー 2)	20
6) 筑波技術大学企画 聴覚障害学生が輝く大学教育 (ショートセミナー 3)	24
7) 『対話』がみちびく質の高い支援—聴覚障害学生支援のスタンダードを探る— (全体会企画)	28
4. 前日特別企画報告	
1) 当事者研究をやってみよう! (ワークショップ 1)	42
2) 作ろう支援の三角形—みんなの視点を対話でつなぐ— (ワークショップ 2)	47
3) 支援体制整備のその先にある課題とは? (ワークショップ 3)	54
4) 早稲田大学キャンパスツアー	63
5. 聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2018 受賞ポスター	66

開催要項

- 名 称 : 第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム
- 目 的 : 筑波技術大学では、平成16年から日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）の事務局として、特に聴覚障害学生への支援体制が充実し、積極的な取り組みを行ってきている大学・機関と共同で、聴覚障害学生支援に関するノウハウを積み重ね、先駆的な事例の開拓を行ってきた。そして障害者差別解消法の施行をはじめとする昨今の情勢の変化を受け、本ネットワークは平成30年度からは新体制をスタートさせ、より広く強固なネットワークの構築を目指している。
- 本シンポジウムでは、全国の大学における聴覚障害学生への支援実践に関する情報を交換するとともに、本学ならびに本ネットワークの活動成果をより多くの大学・機関に対して発信することで、今後の高等教育機関における聴覚障害学生支援体制発展に寄与することを目的とする。
- 日 時 : 平成30年10月28日（日）9時30分～16時
※10月27日（土）は「前日特別企画」としてワークショップおよびキャンパスツアーを実施
- 会 場 : 早稲田大学 早稲田キャンパス 国際会議場
（新宿区西早稲田 1-6-1）
- 対 象 : 全国の大学等で障害学生支援を担当する教職員、及び聴覚障害学生、支援者
その他高等教育機関における障害学生支援に関心のある方々
- 主 催 : 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）
国立大学法人筑波技術大学
- 共 催 : 早稲田大学
- 協 力 : 東京大学バリアフリー支援室
日本社会事業大学
関東聴覚障害学生サポートセンター



- 後 援 : 文部科学省
独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO)
東京大学 障害と高等教育に関する
プラットフォーム形成事業 (PHED)
京都大学 高等教育アクセシビリティプラットフォーム (HEAP)
- 参 加 費 : 無料
- 大 会 長 : 大越 教夫 (筑波技術大学)
- 実 行 委 員 長 : 佐藤 正幸 (筑波技術大学)
- 事 務 局 長 : 白澤 麻弓 (筑波技術大学)
- 幹 事 : 磯田 恭子 (筑波技術大学)
中島亜紀子 (筑波技術大学)
萩原 彩子 (筑波技術大学)
- 実 行 委 員 : 三神 弘子・大久保裕子・黒田 泰・志磨村早紀 (早稲田大学)
杉中 拓央 (小田原短期大学／早稲田大学)
中津 真美 (東京大学)
斉藤くるみ (日本社会事業大学)
山本 篤・田中 啓行 (関東聴覚障害学生サポートセンター)
松崎 丈 (宮城教育大学)
金澤 貴之 (群馬大学)
石原 保志・小暮 聡子・三好 茂樹・谷 貴幸・井上 正之・
河野 純大・守屋誠太郎・石野麻衣子・吉田 未来・坂井 肇
(筑波技術大学)
- 協 力 : 学生アルバイトの皆様
(早稲田大学・日本社会事業大学・筑波大学・筑波技術大学)

◆ プログラム ◆

10月28日(日)

午前 セッション企画

	聴覚障害学生に関する 実践事例コンテスト 【1階 ロビー】	関連団体活動紹介 【3階 第1会議室A】	教職員実践事例発表 【3階 第1会議室B】
9:30 ～ 12:00	9:30～10:45 ＜前半発表＞ ・札幌学院大学 ・東北大学 特別支援室 ・東北福祉大学 障がい学生サポート チーム ・千葉大学 ノートテイク会 ・愛知教育大学 情報保障支援学生団体 「てくてく」 ・愛媛大学 障がい学生支援 ボランティア(CBP) ・福岡教育大学 障害学生支援センター ・特定非営利活動法人 ゆに	<ul style="list-style-type: none"> ・日本財団 ・障害と高等教育に関する プラットフォーム形成 事業(PHED) ・高等教育アクセシビリ ティプラットフォーム (HEAP) ・東京手話通訳等派遣 センター ・株式会社 自立コム ・フォナック補聴器 	10:15～11:15 ＜発表者在席時間＞ ・宮城教育大学 しょうがい学生支援室 ・東北大学 学生相談・特別支援 センター 特別支援室 ・群馬大学 学生支援センター・ 手話サポーター養成 プロジェクト室 ・目白大学・短期部 障がい等学生支援室 ・首都大学東京 ダイバーシティ推進室 ・放送大学 情報コース ・筑波技術大学 障害者高等教育研究 支援センター ・小田原短期大学 ・関西学院大学 総合支援センター キャンパス自立支援室
	10:45～12:00 ＜後半発表＞ ・北星学園大学 アクセシビリティ 支援室 Note Takers ・宮城教育大学 しょうがい学生支援室 ・早稲田大学 障がい学生支援室 ・東京学芸大学 障がい学生支援室 ・首都大学東京 ダイバーシティ推進室 ・日本福祉大学 学生支援センター ・大阪教育大学 障がい学生修学支援 ルーム ・松山大学 障がい学生支援団体 POP		※発表者在席時間以外に については、基本的に教職員 のみの入室とし、12:00以 降は全参加者に開放した。



【 】内は会場

	ショートセミナー１・２ 【３階 第２会議室】	ショートセミナー３・展示 【３階 第３会議室】
9:30 ～ 12:00	9:45～10:15 ショートセミナー１ 「情報保障支援者の養成に関する 先駆的な取り組み」 講師：斉藤くるみ氏 岩田恵子氏 （日本社会事業大学） 平山彩美氏 （卒業生／公立ろう学校教師）	ショートセミナー３・展示 筑波技術大学企画 「聴覚障害学生が輝く大学教育」 企画担当： 谷貴幸氏 井上正之氏 守屋誠太郎氏 （筑波技術大学）
	10:30～11:15 ショートセミナー２ 基礎講座 「建設的対話から始まる障害学生支援 —合理的配慮の基本とは？—」 企画担当：山本篤氏 （関東聴覚障害学生サポートセンター） 講師：太田琢磨氏（愛媛大学）	<div style="border: 1px dashed black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <p><講演内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ○産業技術学部の紹介 ○高大連携の取り組み紹介 ○文泉こどもクラブの実施 ○アクティブラーニングの実践 ○つくば市UD研修 ○ミニ卒研の実施 ○体験授業 「誰でも分かるコンピュータ シミュレーション」 </div>

午後 全体会

【 】内は会場

	全体会 【1階 井深大記念ホール】
13:30	<p>全体会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主催者挨拶 ・来賓挨拶 ・PEPNet-Japan 新体制についての説明 <p>・全体会企画 『対話』がみちびく質の高い支援 —聴覚障害学生支援のスタンダードを探る—</p> <p>司会：中津真美氏（東京大学） 講師：田中啓行氏（関東聴覚障害学生サポートセンター） 藤島省太氏（宮城教育大学） 吉川あゆみ氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）</p> <p>・聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2018 表彰式</p> <p>・閉会挨拶</p>
16:00	終了

前日特別企画 概要

【ワークショップ】

聴覚障害学生支援に関わるトピックスを取り上げ、少人数でのディスカッションやワークを通じて各テーマへの理解を深めるとともに、参加者同士の情報交換を行い、各大学等における支援の充実と発展に寄与することを目的とする。

日時：10月27日（土） 13：00～16：00

会場：早稲田奉仕園 セミナーハウス（新宿区西早稲田 2-3-1）

	対象	タイトル／概要／講師	定員
1	聴覚障害学生	<p>「当事者研究をやってみよう！」</p> <p>聴覚障害学生が、自身の抱える困りごとについて言語化することを通し、問題点を整理するとともに、周囲に伝えたり解決策を講じたりするための方法を学ぶ。</p> <p>講師：松崎丈氏（宮城教育大学） 綾屋紗月氏（東京大学）</p>	20 名
2	支援学生・聴覚障害学生・教職員	<p>「作ろう支援の大三角 —みんなの視点を対話でつなぐ—」</p> <p>ゲームや対話等のグループ活動を通し、聴覚障害学生・支援学生・担当教職員それぞれが、お互いの見ている世界の違いを理解し、よりよい支援を考える。</p> <p>講師：杉中拓央氏（小田原短期大学） 志磨村早紀氏（早稲田大学） 黒田泰氏（早稲田大学） 秋元麻氏（元支援学生） 川口雅史氏（元支援学生／ （株）スポーツ IT ソリューション）</p>	40 名 （教職員 15 名、 学生 25 名程度）
3	教職員	<p>「支援体制整備のその先にある課題とは？」</p> <p>障害学生支援の体制が発展してもなお、解決が難しく残される支援上の課題とは何か、参加者の意見をもとに洗い出し、今後の支援のあり方について協議する。</p> <p>講師：金澤貴之氏（群馬大学） 白澤麻弓氏（筑波技術大学）</p>	25 名

【 早稲田大学キャンパスツアー 】

本シンポジウムを早稲田大学にて開催することにあわせ、全国からの参加者を対象として会場となる早稲田大学キャンパスツアーを実施する。大学内の伝統的な校舎や特徴的な施設を学生ガイドの案内で回り、バリアフリー状況ならびに最新設備等を見学することを目的とする。

日時：10月27日（土） 1回目：13：30～15：00／2回目：15：30～16：30

会場：早稲田大学 早稲田キャンパス ※集合及び解散場所は参加者に別途連絡する

	実施時間	定員	備考
1 回目	13：30 ～15：00	18 名	通常 60 分でまわるプログラムを 90 分かけてゆっくりまわるコース。定員を超えた場合は、移動に困難がある方を優先。
2 回目	15：30 ～16：30	55 名	

※ワークショップ、キャンパスツアーともに、事前申込み制として定員を設け実施した。

シンポジウム 企画報告



聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2018

石野麻衣子¹⁾

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター¹⁾

1. はじめに

PEPNet-Japan では、2008 年からシンポジウム内企画として「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト」を開催している。これは、全国の大学における聴覚障害学生への支援実践に関する情報を交換することで、今後の高等教育機関における聴覚障害学生支援体制の発展に寄与することを目的とするものである。

本報告は、今年度シンポジウムで実施したコンテストについて報告する。

2. 概要

本コンテストは、シンポジウム当日の 9 時 30 分～12 時、セッション企画の一つとして実施した。

応募団体は、あらかじめ作成したポスターを当日掲示して発表を行い、参加者からの質問に回答する形で、情報交換を行った。学会のポスター発表をイメージしていただくとわかりやすい。発表時間は、前半を 9 時 30 分～10 時 45 分、後半を 10 時 45 分～12 時とし、各団体に発表時間を割り振った。

参加者は、発表を見た上で、参考になると思った団体、応援したいと思った団体など、各々の基準に基づき投票を行った。また、コミュニケーションも含めたプレゼンテーションスキルを表彰する「プレゼンテーション賞」の審査員が、立場を明かさずに各団体の発表を聞き、合議により受賞団体を決定した。

この結果に基づき、全体会の 15 時 30 分～16 時に表彰式を行った。

3. 応募状況及び結果

今回は、16 団体（うち、大学 15 校、NPO 法人 1 機関）の応募があり、投票及び審査の結果、表 1 の通り受賞団体が決定した。



図 1 発表の様子（写真）



表 1 投票及び審査結果

賞	受賞団体
PEPNet-Japan 賞	早稲田大学 障がい学生支援室
準 PEPNet-Japan 賞	宮城教育大学 しょうがい学生支援室
グッドプラクティス賞	大阪教育大学 障がい学生修学支援ルーム
新人賞	北星学園大学 アクセシビリティ支援室 Note Takers
プレゼンテーション賞	札幌学院大学
奨励賞	東北大学 特別支援室 利用学生・学生サポーター 東北福祉大学 障がい学生サポートチーム 東京学芸大学 障がい学生支援室 首都大学東京 ダイバーシティ推進室 千葉大学 ノートテイク会 愛知教育大学 情報保障支援学生団体「てくてく」 日本福祉大学 学生支援センター 特定非営利活動法人ゆに 愛媛大学 障がい学生支援ボランティア(CBP) 松山大学 障がい学生支援団体 POP 福岡教育大学 障害学生支援センター

4. 発表内容

PEPNet-Japan 賞を受賞した早稲田大学は「大学生活に寄り添う支援」をテーマとしたポスターで、1 人の聴覚障害学生の入学から卒業までの過程を追いながら、支援室の取り組みを紹介した。準 PEPNet-Japan を受賞した宮城教育大学は「見えないものと向き合う」と題し、利用学生、支援学生、運営スタッフが実は抱えていた悩みと向き合い、考え、そこから積み重ねた取り組みを発表した。視覚障害者用の触ってわかるポスターも、障害の有無に関わらず伝わる発表のあり方の一つとして、話題を呼んだ。

発表全体を通して見ると、大学間連携の取り組みや、被災の経験から明らかになった課題、教育実習時の支援など、多岐に渡るテーマが取り上げられていたが、特に聴覚障害学生・支援学生・支援室スタッフ間の連携やコミュニケーションのあり方について言及した発表が多く見られた。

表 1 の PEPNet-Japan 賞～プレゼンテーション賞受賞団体のポスターについては、66 ページ以降に掲載している。奨励賞も含めた全てのポスターは、当日資料及び PEPNet-Japan ホームページのシンポジウム報告ページにも掲載しているため、ぜひご覧いただきたい。

また、発表方法にも工夫が見られ、ポスターを掲示するだけでなく、スライドを用いたプレゼンテーションや資料の配付、音声認識システムを用いた文字通訳などを実施する様子が見られた。

5. まとめにかえて

今年度のシンポジウムの全体テーマは『これからの聴覚障害学生支援—今「対話」を考える—』であった。本コンテストは、このテーマに沿った発表を募集したものではなかったものの、図らずも、各大学が障害者差別解消法施行後の「対話」を模索し、質の高い支援を実践していることを、コンテストを通して知ることができた。これらの実践が一堂に会し、多くの参加者と共有されたことは、大変有意義であった。

また、障害の有無に関わらず全ての参加者に伝えるための工夫に、広がりが見られたことも、今年度の特徴だった。プレゼンテーション賞の審査員から特に評価が高かった団体は、ただ資料を渡すだけで終わりにするのではなく、きちんと参加者に向き合い説明をしたり、音声認識システムにただ認識させるだけではなく、修正者を置き認識結果を修正したりと、もう一步踏み込んだ「対話」があった。

今年度も充実した情報交換がなされたコンテスト。来年度、より一層充実した対話の場になることを期待したい。



図2 コンテスト会場の様子（写真）



図3 表彰式の様子（写真）

教職員による聴覚障害学生支援実践発表 2018

石野麻衣子¹⁾

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター¹⁾

1. はじめに

2016 年よりシンポジウム内企画として実施している「教職員による聴覚障害学生支援実践発表」は、聴覚障害学生支援に関わる教職員を対象とし、発表者が自らの実践を発表し、参加者と共有することで、新たな支援実践につなげることを目的としている。

今年度は 9 大学の関係者よりご発表をいただき、大変充実した情報交換の場とすることができた。本稿ではこの様子を報告する。

2. 概要

本企画は、セッション企画の一つとして、シンポジウム当日の 9 時 30 分～12 時に実施し、うち 10 時 15 分～11 時 15 分は発表担当者による説明を必須とした。発表者は、事前に作成したポスターを掲示し、これに基づき発表を行った。上記の時間は、教職員という立場を同じくする者同士で密な意見交換を行うため、参加対象者を教職員とし、昼食休憩中は、どなたでも自由にご覧いただける形とした。



図 1 発表の様子（写真）



図 2 発表者と参加者がやりとりする様子（写真）

3. 発表内容及び発表者

今年度の発表内容及び発表者は表 1 の通りである。

表 1 発表内容及び発表者

タイトル	機関名及び発表者
未来の大学生に向けた しょうがい学生支援に関する理解・啓発 ～オープンキャンパスでの活動を通して～	宮城教育大学 しょうがい学生支援室 前原明日香 及川麻衣子 佐藤晴菜
本学における聴覚障害学生支援の 資源利用に関する報告	東北大学 学生相談・特別支援センター 特別支援室 高橋真理 榊原佐和子
授業における手話通訳者養成の実践報告 —手話通訳養成講座初級レベル準拠 「日本語と日本手話の違いを学ぶⅠ」 について—	群馬大学 教育学部 金澤貴之 学生支援センター・手話サポーター養成 プロジェクト室 能美由希子 二神麗子 川端伸哉 下島恭子
聴覚障がい学生のこえにあわせた ノートテイクの養成や配置工夫について	目白大学・短期部 障がい等学生支援室 荒木朋依
ダイバーシティ推進事業を基盤とした 支援学生の養成	首都大学東京 ダイバーシティ推進室 横山正見 藤山新 学長室 中西翼
インターネット配信によるラジオ講義の 画像・字幕付与型コンテンツの開発研究	放送大学 情報コース 広瀬洋子
スポーツ分野におけるろう者学教育 コンテンツの開発 —競技スポーツ経験における 自己変容に着目して—	筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 障害者基礎教育研究部 門脇翠 小林洋子 大杉豊
先進校において選択的支援を受けず 卒業・就職した聴覚障害学生の 1 例	小田原短期大学 杉中拓央
キャンパス間遠隔情報保障の検証結果と 今後の課題について	関西学院大学 総合支援センターキャンパス自立支援室 松浦考佑 生野茜

今年度の発表は、学内外の資源との連携、情報保障者の養成、理解啓発など、テーマは多岐に渡った。どの発表も示唆に富み、多くの大学関係者が興味を持ち、活発なやりとりを通して情報交換を深めていた。

各発表の詳細は、当日資料の巻末に掲載している。ぜひお読みいただきたい。

4. まとめにかえて

多くの大学で直面する課題から一歩先行く取り組み、そして高校生を対象とした未来志向の実践まで、多様な実践事例を共有できたことは、この企画の大きな成果だと言えるだろう。教職員が交流を深める場としても機能しており、この点も有意義であった。来年度以降も引き続き、活発な意見交換が可能な形を検討し、全国の障害学生支援の底上げにつながる企画としていきたい。

関連団体活動紹介

磯田恭子¹⁾

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター¹⁾

1. はじめに

本企画は、大学間・関連機関間のネットワーク形成と活性化に寄与することを目的に、セッション企画の一部として実施したものである。聴覚障害学生や支援担当教職員等が地域の社会資源を知るための場としての効果も考え、実行委員会でも検討したうえで、開催地の関連団体に出展を依頼している。

2. 内容

聴覚障害学生支援に関わる周辺領域の諸機関に出展を依頼し、以下の8機関が参加した。

- 日本財団 ※PEPNet-Japan 協力機関
- 東京大学 障害と高等教育に関するプラットフォーム形成事業（PHED）
- 京都大学 高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）
- 東京手話通訳等派遣センター
- 株式会社 自立コム
- フォナック補聴器
- 就労移行支援事業所 いそひと大手町
- 全日本ろう学生懇談会

会場では多くの参加者が熱心に説明を聞く姿が見られ、大学と聴覚障害者支援、情報保障支援に関わる各種団体が相互に活動の様子を知り、交流を図る場となっていた。

また、実際の支援機器に触れることで、支援場面への導入可能性も具体的にイメージすることができたとの声もあり、今後も開催地との連携を図りながら実施していきたい。



図1 会場の様子（写真）



図2 説明の様子（写真）

「情報保障支援者の養成に関する先駆的な取り組み

—当事者が支援者になること—」ショートセミナー報告

齊藤くるみ¹⁾

日本社会事業大学 社会福祉学部¹⁾

1. はじめに

日本社会事業大学では、聴覚障がい者の教育環境充実のための様々な取り組みを進めてきている。

(2008年：ろう者の教授陣が日本手話で教える「手話によるろう者の大学事始め」の開講、2009年：「日本手話」を語学科目と位置づけて「日本手話」を必修科目とする特別支援教職課程を設定、2010年：日本財団の助成を受けて大学・大学院・通信科の全ての授業に情報保障(PC テイクと手話通訳)を配置、ろう・難聴の高校生のための大学進学塾を設置、2014年：入試科目に「日本手話」を導入(注1))



図1 会場の様子(写真)

こうした実践を経て、2016年には支援者養成のための「コミュニケーション・バリアフリー課程」を設置している。これは文部科学省の「職業実践力育成プログラム(BP:ブラッシュアップ・プログラム)」として開設されたもので、3種類の支援者養成(手話通訳・PCテイク・盲ろう支援者)のコースを設置し、ろう当事者はこの中で手話通訳(ろう通訳)および盲ろう支援のコースで活躍している。これまでの過程においては、ろう当事者主導で活動してきたことが重要であった。ろう・難聴者を支援するソーシャルワーカーはろう・難聴当事者であることがベストであるという信念のもと、学生を「当事者ソーシャルワーカー」に育てるという目標があったからでもある。

こうした実践は「障害者の権利に関する条約」第24条3および4、第30条の実現と言える。

第24条

- 3 (a) ……障害者相互による支援及び助言を容易にすること。
- (b) 手話の習得及び聾社会の言語的な同一性の促進を容易にすること。
- (c) ……その個人にとって最も適当な言語並びに意思疎通の形態及び手段で、かつ、学問的及び社会的な発達を最大にする環境において行われることを確保すること。
- 4 締約国は、1の権利の実現の確保を助長することを目的として、手話又は点字について能力を有する教員(障害のある教員を含む。)を雇用し、(以下、省略)

第 30 条

4 障害者は、他の者との平等を基礎として、その独自の文化的及び言語的な同一性（手話及びろう文化を含む。）の承認及び支持を受ける権利を有する。

本会においては、本学での養成を経て当事者支援の実践を担っている 2 名の講師から、実体験を元にした報告を行った。

2. 内容

今回 2 名の講師からの報告と、筆者からの障害者の能力・貢献に関する意識向上について説明を行った。各報告の概要をまとめる。

2.1 当事者が支援すること・・・モデル 1

講師：岩田恵子氏（日本社会事業大学）

43 年前に大学に入学した当時は、聴覚障がい者に対する理解も不十分であり、支援を利用することもできなかった。卒業したろう学校の先生からは、健常者の 2～3 倍頑張りなさい、努力を続けなさいと言われた。そこで、大学の授業では一番前に座り、先生の口話を懸命に読みながら授業に出席していたが、理解することへの限界を感じていた。それを先生に伝えたところ、「点字ならできるのか？体育の時は全て見学で構わない」と、今では考えられないようなことを言われた。

学生時代に米国の大学に訪問した際、ろうの学生が手話通訳をつけて生き生きと学んでいる様子を目の当たりにした。米国で出来ていることが日本で出来ないはずがない、と非常にパワーをもらい、帰国してからは同じ大学の学生に手話を教えるようになった。そして授業への手話通訳の配置を大学に要望し続け、卒業式の時にようやく手話通訳が付いて参加することができた。現在は情報保障が権利として認められるようになっており、時代の流れを実感している。

大学卒業後はろうあ者相談員として、当事者支援に関わる仕事を 25 年間担当し、ろう老人ホームにも 2 年間勤めた。これまで経験してきたことからの学びが多く、今年 6 月からは日本社会事業大学のバリアフリー支援室で、ろう学生支援に関わっている。今感じていることとして、これまで歴史を変えてきたのは当事者の力だけではなく、支援者と一緒に活動してきたことによると思う。今の世代のろう学生には、これまでの歴史についても知っておいて欲しいと考えている。当事者も情報保障を受けるだけではなく、一緒に作っていく、ろう者と聴者が一緒に支援して行く環境が今後大切になってくるのではないだろうか。



図 2 岩田恵子氏
(写真)

2.2 当事者が支援すること・・・モデル2

講師：平山彩美氏（日本社会事業大学卒業生／公立ろう学校教諭）



図3 平山彩美氏
（写真）

大学入学まではろう学校で学び、日本社会事業大学を今年3月に大学を卒業した。現在は公立のろう学校に勤務している。大学ではろう教育とソーシャルワークのそれぞれについて学んだ。現職の立場から思うことを3つ話したい。

1 点目は、教育とソーシャルワークとの関わりについて。ろう学校に勤務する中で、教育とソーシャルワークの2つの立場でのジレンマを常を感じている。例えば、教育の場合には聴者の文化を身につけさせるという考え方が強いが、ソーシャルワークの場合にはろう文化を大切に考える考え方になるなど、ズレが生じている現状があると感じている。

2 つ目に、インサイダー言語とアウトサイダー言語について。インサイダー言語は、所属するグループや組織の中で共通する、通じ合える言語という概念であり、ろう者の世界で言えばろうか難聴かを区別することもあり、ろう文化とも同義であるが、聴者にとっては区別が難しい。ろう者も難聴者もまとめて「聞こえない人」と言われているが、当事者にとってはそれぞれが異なると捉えている。ろう学校でも同様であると言える。現在勤務する中でろう教員の強みとして、子どもの様子の変化に気付くことが多く、健聴の教員に伝えることができる点が挙げられよう。

3 つ目は当事者性について。当事者が支援者になるにあたっては、当事者性が分かっているかどうかの大事であるだろう。例えば、ろう文化と聴文化の間に生じるズレがある場合に、ろう教員はそのズレについてどんな説明ができるか。ろう教員は通訳の役割や、聞こえない子どもと聞こえる教員をつなぐ、聴者とろう者の2つの世界をつなぐ役割も担っていると思っている。当事者の立場でろう教育にどうアプローチしていくか、今後も考えて行きたい。

2.3 障害者の能力・貢献に関する意識向上について

筆者からは、障害者の能力・貢献に関する意識向上について情報提供を行った。障害者権利条約の中で、8条では障害をプラス面から見るようになってきているが、日本ではその意識はまだ低い状況である。障害者に対する肯定的認識、それを社会に対して啓発をしていかなければならないと考えている。また、労働市場に対する障害者の貢献についても書かれているが、現状としては「支援してあげる」という意識を持たれる方が多いのではないかなと思う。しかし、その一方で支援をする立場からは、どうしても自分は当事者になれないというコンプレックスを感じる時がある。だからこそ支援者と当事者とが一緒にできないこと、特に当事者にしかできない支援があることに注目してもらうため、今回、当事者支援者からの話題提供を行った。



2.4 質疑応答

参加者との質疑応答の一部を紹介する。

会場／斉藤先生の話にあった「当事者にしかできない支援」という点、立場を変えて支援を、ということの必要性を考えるきっかけを頂けた。

斉藤／これまでは支援の時に当事者の話を聞かずに進められることがあり、そのことで支援を遅らせてきた現状があると思っている。健常者は当事者について完全に理解することは不可能であることを認識した上で、当事者からの意見を聞く必要があるだろう。

岩田／私自身は両親や親戚など周囲にろう者のロールモデルが大勢いる環境だった。ろうの子どもの両親のうち 90%は健聴者であると報告されているように、大人のろう者のモデルが非常に少ない状況にある。特に子ども達にはたくさんのろう者に触れて、多くのロールモデルがいることを知ってもらいたい。

3. 到達点と課題

今回は短時間でのセミナーということもあり、参加者との議論を深めることができなかったのは残念であった。しかしながら、参加者の多くが当事者からの体験に真摯に向き合い、当事者が支援をすることの意義について考える機会を提供することができたのではないだろうか。当事者は支援を利用するだけでなく、当事者だからこそできる支援を今後も充実させていくために、本学での実践が広まってくことを期待したい。

注1) 一般の学生の入試が「国語」「英語」「面接」で実施される後期日程入試を、ろう者については「国語」「英語」「日本手話」「面接」で実施するというものである。

基礎講座「建設的対話から始まる障害学生支援—合理的配慮の基本とは?—」 ショートセミナー報告

山本 篤¹⁾，太田 琢磨²⁾

関東聴覚障害学生サポートセンター¹⁾，愛媛大学²⁾

1. 企画趣旨

障害者差別解消法が施行されてから 3 年が経過したことにより、障害学生支援への意識が高まり、支援体制構築や見直しを行った大学が多い。しかしながら、いざ体制を整えて支援をしようとしても、教職員が合理的配慮について十分に理解できていなければ障害学生との間でトラブルが生じる可能性が高い。入学決定から支援開始までの限られた時間内に、障害学生本人の申し出から対話と調整というプロセスを経て合理的配慮の提供を決定しなければならない。しかしながら、障害学生も保護者も自らのニーズ把握・支援内容等について十分に理解しているとは限らず、担当者がそれを汲み取って対話と調整を行えなければ、それは結果的に聴者と同等の修学機会を失わせてしまう事になる。もちろん、聴覚障害学生にとっても、自らの障害と支援のニーズ、支援開始までのプロセスについて理解することは、双方にとって対話と調整がスムーズになるため必要なことだと言える。

これらをふまえ、本セミナーでは大学で聴覚障害学生を受け入れ、「合理的配慮の提供」をするにあたってのプロセス、大学入学前後の面談の進め方、面談内容に基づき支援内容を決定するまでの流れについて、事例を基に解説を行った。特に支援に至るプロセスのうち、「合理的配慮の提供」に必要な「建設的対話」の必要性について理解を深めることを目的としたことで、支援担当者や聴覚障害学生にとって障害学生支援をスタートさせるための知識提供の機会となったものとする。

2. 内容

2.1 支援の導入部分

現在、多くの大学に聴覚障害のある学生だけではなく、その他の障害のある学生も入ってくるようになってきた。学生の入学が決まるタイミングだが、国公立大学の場合には 3 月上旬に前期日程の結果が判明し、遅い場合は 3 月下旬に最終確定となるため、入学決定から支援開始までの期間が 2～3 日しかないこともある。

相談に来る学生の状況としては、入学直前・引っ越してきた直後に駆け込み的に来るケースが多い傾向にある。また、保護者の中には大学のホームページで支援に

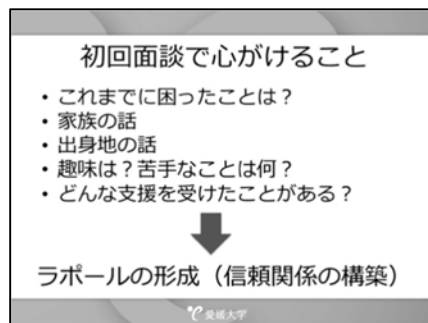


図1 当日投影スライド
「初回面談で心がけること」

関する情報を見たが、本当に支援提供をしてくれるのか不安に思っている場合も多く、慌ただしい状況の中でどのように支援の導入を決めていくのかが、とても大事なポイントである。

実際に愛媛大学でもかなりの学生が駆け込んでくる。支援室に来て、いきなり「支援をしてください」という様なざっくりとした依頼を受けることが多い。そのような中で、初回面談の時に心がけている事として、高校までの中でどのようなことに困っていたか、家族と家にいる時にはどのようなコミュニケーションをしているのか、などアイスブレイク的な話をしながら聞いている。まずは身近な話題や学生個人のパーソナリティなどの話題から会話を初めることで、信頼関係の構築を行うように心がけている。

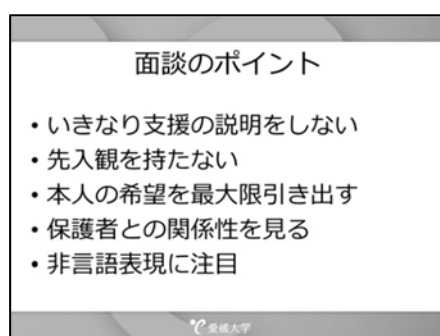


図 2 当日投影スライド
「面談のポイント」

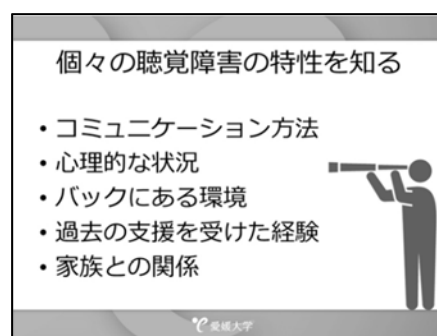


図 3 当日投影スライド
「個々の聴覚障害の特性を知る」

2.2 合理的配慮

次に合理的配慮の考え方について。「配慮」と「合理的配慮」には大きな違いがある。中には親切なあまり、“困っているよね、やってあげよう”という気持ちが先に出てしまう先生もいる。これはありがたいことでもあるが、逆に学生本人の負担になってしまうこともあるため、注意が必要になる。

合理的配慮は、英語では「reasonable accommodation」となる。reasonable は合理的という意味だが、accommodation は便宜を図る・調整する、という意味で、それぞれの障害者の事情に合わせて必要な調整をして下さいという解釈となる。

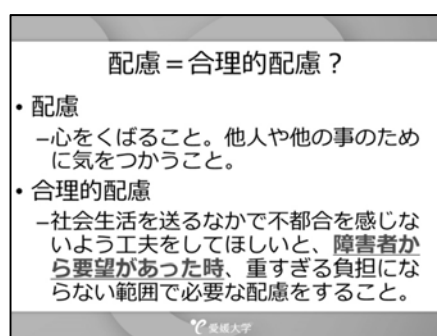


図 4 当日投影スライド
「配慮＝合理的配慮？」

2.3 聴覚障害学生の要望に対して

初めて聴覚障害学生支援を提供するケースでは何から始めれば良いのか分からない場合や、予算が確保されていないため、支援が提供できないケースもある。学生から積極的に要望を伝えてくる場合には、学生の方が支援に関する知識を持っている事が多く、その場合はむしろチャンスと捉えた方が良い。聴覚障害学生に先生になってもらい、支援方法について学ぶこともできると思う。ただし、それでも実際にはすぐには十分な支援が提供できないケースもある。そのような場合は、まず学生の意見を受け止めた上で、過度な負担に当たるところは何か、しっかり学生と話し合う必要がある。特に、どうして今はこれが難しいのか、という事を学生自身が納得できるように分かりやすい言葉で説明する努力をしなければならない。

次に、どこまでを支援室が担い支援提供をしなければならないのか。支援の提供範囲については入学前相談から入試、授業、試験等は当然対応すべきであるが、注意が必要な所もある。例として、留学やインターンシップ・課外活動への参加等がある。この場合はどこが主催なのかにもよるが、関係各所と相談・調整が必要となる。こうした注意点を踏まえて、最初の面談から学生とコミュニケーションを取りながら信頼関係作りを進め、少しずつ支援体制を整えていただければと思う。

3. 質疑応答

講師からの解説後に会場との質疑応答を行った。時間の関係上、多くは受けられなかった事は残念であるが、一部内容を紹介したい。

質問／コーディネーター、支援する側として、必要な情報を入手することと、相手との信頼関係を作ることのバランスで考慮されていることはあるか。

太田／まず最低限、最初の時に把握しておかないといけない情報として、どの支援であれば学生本人が一番受け慣れているのか、実際に受けたことがある支援の内容は、早めに聞いておいた方がいい。早ければ3月下旬から新入生向けの説明会が始まり、単位の取り方や各種説明会の日程・場所など、一般の学生も、かなり混乱するような状況になる。これらの予定に合わせて支援を提供できるよう、必要な情報を優先して聞いて欲しい。

ただし、実際に支援を受けてみてどうだったかを必ず確認して頂きたい。「この支援

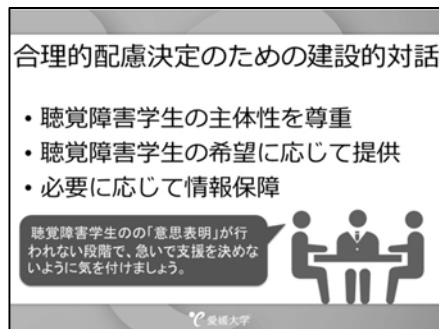


図5 当日投影スライド

「合理的配慮決定のための建設的対話」

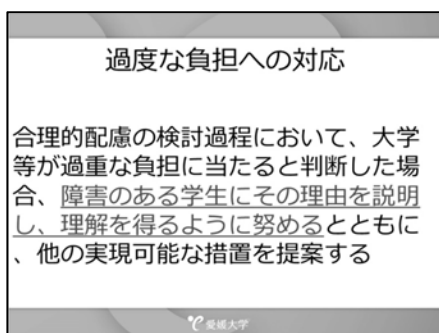


図6 当日投影スライド

「過度な負担への対応」

はちょっと合わないかもしれない・違うかも」、などの意見が出る場合は、支援方法を変更できることも伝えている。私の場合には、4月のガイダンスの際に必要な支援内容を優先して聞いて、その後は高校までの話をしながら、「困ったことがあったんだね、その時はどうしたの?」と、かなり間接的に、回りくどい、時間の掛かるやり方ではあるが、ストレートに支援について聞かないというプロセスを通して、少しずつ学生の希望を引き出すようにしている。

質問／他の障害のある学生とも関わる中で、必要とされている支援と本人の要望について、マンパワーも非常に少ない中でどう折り合いを付けながら支援をしていくのかに日々悩んでいる。

太田／「障害」と言っても様々な学生がいて、障害それぞれだけでなく、個人個人でも違う。やはり実際に支援を受けるためのエビデンスとなるもの、例えば診断書や、高校までの個別の教育支援計画なども参考にしつつ、必要に応じて高校の先生とも連携をした上で、優先した方がいいところだけは早めに確認するようにしている。場合によっては大学という環境の中で逆に必要がなくなる支援も出てくると思うので、可能であれば高校の先生に「ここだけは押さえた方がいい」という支援内容を確認していただければと思う。

もう一つ、本学の場合には幸い特別支援教育専門の先生方がおり、障害学生修学委員会にも入っていただいているので、支援室職員だけでは判断が困難なケースを委員会に上げたり、学内のカウンセリング部門で話を聞いてもらったりするなど、学内各部署と協力関係を作りながら、なんとか対応している状況である。



図7 当日の様子（写真）

4. まとめ

本セミナーでは、講師からは実体験に基づいた分かりやすい解説をいただいた。今後の障害学生との面談で、学生の本音を引き出す上でのヒントを多く示すことができ、全体会で取り上げられた面談事例を理解する際の参考になったのではないかな。

また、予想以上に多くの参加者を得た。すでに支援体制が構築されている大学等であっても異動や新任等で未経験もしくは前任校とは違う環境で慣れていない担当者が多い印象であった。この事からも、今後も合理的配慮や建設的対話の基本について学ぶことができる場を設ける必要があると思われる。

参考文献

- [1] 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク「聴覚障害学生サポートブックー18歳から学ぶ合理的配慮ー」（2018）

筑波技術大学企画「聴覚障害学生が輝く大学教育」 ショートセミナー報告

谷貴幸¹⁾，井上正之¹⁾，山脇博紀¹⁾，守屋誠太郎¹⁾

筑波技術大学 産業技術学部¹⁾

1. はじめに

筑波技術大学 産業技術学部では、“伝わる大学、伝える大学”を目標として、障害のある学生に視覚提示資料、手話等を用いて、直接的な教育を行っている。これに加えて、様々な取り組みを実践することによって、「聴覚障害学生が輝く大学教育」の実現を目指している。本ショートセミナーでは、産業技術学部において実施している特別支援学校との連携事業、アクティブラーニング、UD 研修など学生が主体的に活動できる取り組み等を紹介するとともに、直接的教育の一端を体験して頂くことにより、本学部が行っている内容を紹介した。

2. 取組内容の紹介

2.1 特別支援学校との高大連携の取り組み

筑波技術大学では、これまでに培ってきた聴覚障害者への専門的教育環境・教育資産を活かし、大学と特別支援学校との組織間連携における協調型教育プログラムを実践するための教育拠点の形成を目指している。以下に、特別支援学校との教育プログラム例を示す。

- ・東京都立葛飾ろう学校：合同インターンシップデザイン関連の授業を実施、文泉こどもクラブ・交流会の実施
- ・立川ろう専攻科：合同修了研究発表会（中間発表、最終発表会を実施）
- ・筑波大学附属聾学校：理系科目を中心とした出前授業
- ・北海道高等聾学校：デザイン関連の出前授業・遠隔授業の実施
- ・旭川ろう学校：アメリカ手話・英語の遠隔授業を実施（小中学部対象）
- ・茨城県特別支援学校（3校）との連携事業
- ・フォーミュラカーの展示と産学連携事業の紹介



図1 合同発表会の案内

以上の大学と特別支援学校間との高大連携の取り組みに加え、これを発展させた取り組みとして、同一テーマを対象とした特別支援学校間の研究コンテスト（合同発表会）へと発展させている。平成 29 年度は、“デジタル写真技術：撮影技術と写真加工技術”をテーマとして、東京都立葛飾ろう学校および北海道高等聾学校の生徒らによって、製作した作品による発表会を筑波技術大学にて実施した。

2.2 アクティブラーニングの実践

本学部では、アクティブラーニングを積極的に取り入れ、主体的に学ぶ環境を学生に提供しており、自ら考える力の醸成を図っている。

・実践事例 1：「デザイン基礎論・演習」

課題：ショッピングセンターの休憩場面を観察、
物理的な環境要素を捉える。

AL の手法：ディスカッションを導く技法、
学生を交互に学ばせる技法、事例から
学ばせる技法

予想される効果：メタ認知力、表現力、協働的な学習



図 2 デザイン基礎論・演習（写真）

・実践事例 2：「環境計画演習 1」

課題：学生寄宿舍の目隠しフェンスをデザイン
する。

AL の手法：問題に取り組ませる技法、経験から
学ばせる技法

予想される効果：表現力、協働的な学習、計画・実行



図 3 環境計画演習 1（写真）

2.3 つくば市 UD 研修

本学とつくば市とが連携で進めるユニバーサルデザイン推進事業は、2004 年の「全国地方自治体の UD 事業調査/つくば市民の UD 意識調査」以降継続しておこなわれている。2005 年には前年に実施した事前調査を踏まえて「つくば市ユニバーサルデザイン基本方針」がまとめられた。2007 年より始まった「つくば市職員を対象にしたユニバーサルデザイン研修」は、2011 年よりつくば市新人職員を対象とした研修へと変わり、視覚障害歩行体験や高齢者シミュレーションを実施している。この取り組みは、本年度で 11 回目を迎えている。



図 4 視覚障害歩行体験（写真）



図 5 高齢者シミュレーション(写真)

2.4 ミニ卒研

本学の産業情報学科・情報科学専攻では、

- ・課題解決能力の育成
- ・学年を超えたグループ活動を通しての社会性の育成・強化

などを狙いとして、2018 年度から新たな試みとして毎週月曜の 4 限目・5 限目（14 時 40 分～17 時 50 分）に、プロジェクト型の授業を実施している。

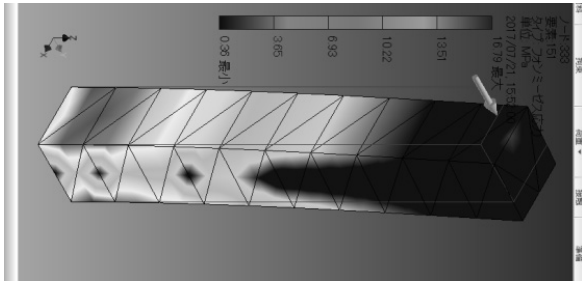
本年度の 1 学期は、「ミニ卒研」を実施し、各学年から 1 名ずつ計 4 名程度でランダムに結成された 16 のチームそれぞれに教員が 1 名ずつつき、情報科学に関する様々なテーマ（ハードウェア、ソフトウェア、データ処理など）に月 1 回以上のペースで取り組んでいる。学期の最後には、このミニ卒研の成果報告として発表会を行い、短い期間ながらもゲーム・教材などの試作、IoT の聴覚障害者支援への応用に関する考察など興味深い内容も多く報告された。本プログラムの実施を通じて、社会において必要とされる様々なスキルを身に付けていくことが期待できる。

2.5 体験授業：誰でも分かるコンピュータシミュレーション

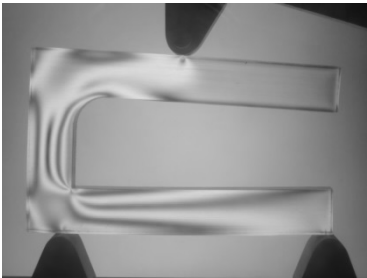
本学では、聴覚に障害のある学生に対して、専門的な教育内容を視覚資料の提示や手話等を使って直接的に行っている。以下に示す体験授業のコンテンツにおいて、視覚資料の使い方や手話による説明などを体験して頂き、実際の雰囲気を経験して頂いた。

講義内容

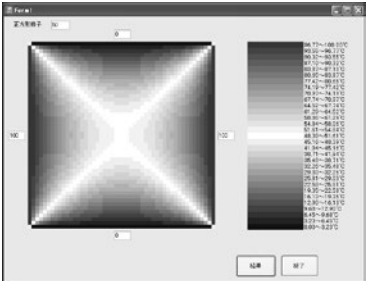
- ・ものづくりにおけるシミュレーションとは？
- ・PCを使わないシミュレーションの体験（光を使った可視化技術）
- ・PCによる設計から計算までの流れ
- ・意外と単純！コンピュータの中での計算手法！



力の解析



光の屈折を使った解析



熱の解析

図 6 体験授業講義内容

3. 今後の課題と展望

以上に示した内容の詳細をショートセミナーおよびポスター展示により紹介した。その様子を以下に示す。今回は、この取り組みに対するディスカッション等は実施しなかったが、今後は教育方法に関する討論などの機会を設けることを検討したい。特に、専門教科の演習・実習などにおいては、特別支援学校の職業科あるいは他大学と同様な課題があることも想定されることから、このような点において共通の認識や相互の工夫の意見交換などが実施できれば、より有意義なセミナーになると思われる。また、今回のセミナーにおいて、その一部は実際に取り組んでいる学生からの説明とした。このような当事者からの紹介を多く取り込む必要があると思われる。



図7 ショートセミナーでの発表およびポスター展示の様子（写真）

「『対話』がみちびく質の高い支援—聴覚障害学生支援のスタンダードを探る—」 全体企画報告

中津真美¹⁾、田中啓行²⁾、藤島省太³⁾、吉川あゆみ²⁾

東京大学バリアフリー支援室¹⁾、関東聴覚障害学生サポートセンター²⁾、宮城教育大学³⁾

1. はじめに

2016年4月「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（以下、障害者差別解消法）が施行されたことに伴い、聴覚障害学生への支援体制を整備する高等教育機関は、増加傾向を示している（日本学生支援機構, 2017）。今後さらなる支援の充実を図るために、本企画では、「合理的配慮とは、聴覚障害学生と教職員との建設的対話を通じて提供されるべき性質のものであり、このプロセスこそが大切である」という同法の趣旨に着目した。

聴覚障害学生と教職員との「対話」とは、ここでは、①聴覚障害学生が、自身の社会的障壁除去の要望の意思表示ができるようになるための対話と、次いで、②合理的配慮の内容の合意形成をするための対話と整理した。支援の充実化を図るために、連続するこれらの対話は、確実に、丁寧に実行されることが求められる。しかし、対話の実態については未整理な点が多く残り、関係者間での共通理解には至っていない現状にある。

そこで本企画では、“聴覚障害学生と教職員の双方が対話を重ね、つねにその時々々の支援ニーズを確認し、支援の最善策をともに検討し、合意形成していく”ことを支援のスタンダードと捉えた上で、「より質の高い支援を導く対話とは何か」について、具体的な例（支援面談場面の動画）を提示しながら検討した。

2. 内容「対話の例を見てみよう」

企画者からの趣旨説明の後、対話の例の映像を見て、講師がコメントを行った。視聴した映像については、図1を参照のこと。

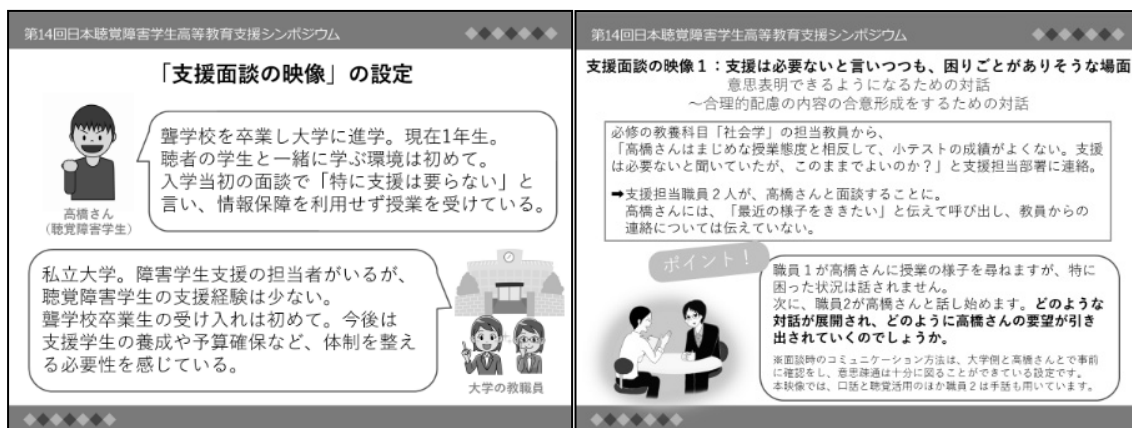


図1 登場人物の設定

図2 映像1の設定



2.1 映像1：支援は必要ないと言いつつも、困りごとがありそうな場面

まず、「①聴覚障害学生が、自身の社会的障壁除去の要望の意思表示ができるようになるための対話の例」として映像1を検討した。映像1の設定は図2の通りである。

■コーディネーターの立場から（田中）

この段階の面談では、必要な支援を考えるために状況を正確に把握することが必要だ。そこで、職員1は、職員側が把握したいことを確認するために「困っていないですか？」と、Yes/Noで答える問診票のような聞き方をしているが、支援利用や大学生活の経験がまだ乏しい1年生にはなかなか答えられない。それに対して、職員2は、聴覚障害学生自体を知ろうとして、学生自身が自分の状況を語れるように、様々な角度から質問する「診察型」の聞き方になっている。職員2は、具体的に、①感情や感覚に寄り添う質問をする、②まだ自分の困りごとを特定するだけの知識がない聴覚障害学生に対して手がかりを示す、③「支援を使ってもいい」という肯定的雰囲気を作り出すという3つのことを行っている。コーディネーターは、職員、聴覚障害学生ともに、相手がどれだけ前提知識を共有しているかが分からないまま話さなければいけないということを踏まえて面談に臨んだほうがいい。



図3 筆者（田中）
（写真）

■聴覚障害学生の立場から（吉川）

聴覚障害学生の立場からは、職員1は遠くにいるような感じがする。情報保障の経験がない聴覚障害学生に通訳をつけることは、子どもに初めてのものを食べさせるようなものだ。例えば、今までカレーライスを見たことも食べたこともない子どもは、大人がおいしそうに食べているのを何度も見る経験を通して、「食べたい」という気持ちを持つ。情報保障も同じで、いろいろな情報保障の手段を見た経験の蓄積の中で情報保障をつけたいという気持ちがわいてくる。職員1は表情が乏しく、笑顔が少ない。初めてのものを食べさせるためにあれこれと工夫するのと同じように、情報保障もハードルを低くする言葉かけが必要だ。職員2は、楽しさをうまく伝えたり、学生が苦勞しているポイントをうまく引き出す問いかけをしている。学生と職員の対等な対話というよりも、むしろ、大学側が聴覚障害学生に寄り添うイメージの対話が必要だと思う。



図4 筆者（吉川）
（写真）

■教員の立場から（藤島）

高校までとは異なり、大学の教員の話は、教科書だけではなかなか理解できない。入学

してすぐの聴覚障害学生は、高校までと同じイメージで「やれます」と意思表示をするだろうが、そううまくはいかない。学生の経験値に大学側が配慮しないと、本人の表面的な言葉を鵜呑みにして、「この学生は大丈夫」と判断してしまう可能性がある。職員1のよう



図5 筆者（藤島）
（写真）

に「どう？」のような質問の仕方だと「大丈夫です」という答えが返ってくるだろう。一方、職員2は、具体的な方法の提起、比較対象の提示を上手にしており、学生が答えやすくなっている。また、「自分で聞くのは大変だなと思うことはない？」などと、相手の気持ちに寄り添うところからスタートしている。支援をする立場には、いわゆるカウンセリング・マインドが必要だ。答えを誘導するのではなく、考えるヒントをうまく提示する。さらに、「一緒に考えましょう」という共同作業としての支援という姿勢が大事である。

■映像1のまとめ

3つの立場に共通するのは、学生の経験値に配慮して、学生が支援のイメージを持てるような対話をする必要があるということであった。大学側は、決して先回りするのではなく、学生と共に考えるスタンスで対話を重ねて、最終的には学生自らが支援を利用してみようと判断できるよう、学生の背中を押す姿勢が望ましいということであろう。



図6 筆者（中津）
（写真）

2.2 映像2：支援利用から2週間が経ち、何か思うことがあるような場面

次に、②合理的配慮の内容の合意形成をするための対話の例として、映像2を検討した。映像2の詳細は図7の通りである。

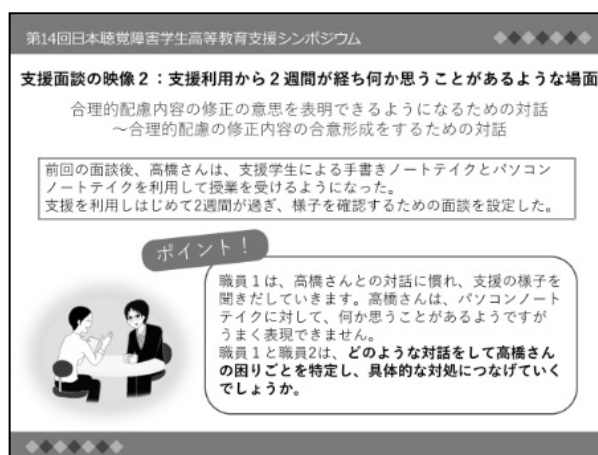


図7 映像2の設定



■コーディネーターの立場から（田中）

職員 1 も親しみを感じられるような話し方をしているが、経験の少なさから、質問のパターンが少なく、内容も具体性に乏しい。それに対して、職員 2 は、聴覚障害学生の困難点を具体的に掘り下げているのに加えて、利用学生としての動き方を提案したり、その動きをサポートすることをそれとなく伝えたりすることで、利用学生としての成長を促そうとしている。また、聴覚障害学生の言葉を引き出すために、先入観を持って決めつけないようにしながら、これまでのコーディネーター経験からいろいろな手がかりを提示している。この点については、経験の浅いコーディネーターでも、他大学の例を集めたり、PEPNet-Japan の成果物を参照したりすることで、経験不足を補うことができるだろう。コーディネーターとしては、聴覚障害学生が社会に出た後も自分で調整できるようになることも念頭に置いて、学生と一緒に動いていくような対話・面談ができるといいと思う。

■聴覚障害学生の立場から（吉川）

ノートテイクしか用意できないという大学に対して手話通訳を要望するためには、自分の聴力や、ノートテイクでは足りない理由などを説明しなければならない。これは食レポのようなものだ。「おいしかった」だけでなく、食べた感じを具体的に説明する必要がある。しかし、食べたことがない料理を出されて、「この料理はどうですか？」と聞かれても、「おいしいです」で終わってしまう。聴覚障害学生が語れるように、「今日のカレーは少し辛かったね、今度はリンゴを入れてみようか」などと語りかけ、一緒に情報保障を作っていく経験をする必要がある。そうした経験を積み重ね、成長したら、自分好みの情報保障の構成に進む。さらに、通訳技術についてのコメントは人に対するコメントになるので、聴覚障害学生には言いづらい。また、聴覚障害学生が一人なのに対して、大学側は組織・集団なので、そのままでは対等な対話にはならない。大学側は、集団性をなくし、聴覚障害学生に寄り添っていく。そのことによってのみ、対等な対話ができるようになるのではないと思う。

■教員の立場から（藤島）

映像からは、「良かった点は？」のように肯定的な答えを誘導している様子が感じられた。支援者がボランティアの学生の場合、支援を受けている学生は、なかなか情報保障に対して意見できないだろう。学生同士の気持ちの交流については、学生を教育する立場できちんと見ないといけない。また、支援の質が、聴覚障害学生が望むレベルに達していない場合にどうするかまで考えないといけない。職員 2 は、聴覚障害学生がうまく表現しきれない部分を言葉に変えていく作業をしていた。そういった問題発見のプロセスを丁寧にやっていくことが大事だ。さらに、非常に重要なのは、聴覚障害学生が一人で要求するのはとても大変だということだ。聴覚障害学生の声や、支援学生に対しても、大学に対しても、コーディネーターが仲介者となって伝えていくことも大事ではないか。支援は、一方

的に「する／される」ではなく、お互いに問題点を共有し、共感しあって、一緒に考えていく姿勢が重要だ。

■映像 2 のまとめ

コーディネーターの立場からは、一般的に聴覚障害学生が抱える困難パターンの知識を持って、対話の着地点を想像しながら、より具体的で細分化した質問をして困難箇所を同定していくという話があった。聴覚障害学生の立場からは、通訳者や職員と相談しながら、聴覚障害学生が自分好みの情報保障を構成できるようになるという話と、どうしたら聴覚障害学生に料理がまずいと言ってもらえるようになるのかという大学側に対する問い、そして、教員の立場からは、「共感し共に考える創造的支援」という、対話を考える際の大きい問題の提示があった。



図 8 当日の様子（写真）

3. まとめと展望

本企画では、障害者差別解消法施行から 2 年半が経過した今、あらためて支援実践における「対話」のプロセスに目を向け、議論を交わした。立場の異なる講師 3 名によるコメントを通じて、聴覚障害学生支援のスタンダードになり得る、より質の高い支援を導く「対話」の在り方について、一定の整理が可能となったと考える。

コーディネーター（田中）の立場からは、より質の高い支援を実行するために、大学側は、聴覚障害学生の困りごとを“正確に”把握することが求められると指摘した。さらに、そのための「対話」の在り方として、大学側は、①感情・感覚に寄り添う質問を通して、聴覚障害学生の意思を自覚的にし、②困難特定の手がかりを提示して困難箇所を同定し、③支援への肯定的雰囲気醸成して、聴覚障害学生が支援を利用する際の心理的負担を和らげていくといった 3 段階の「対話」の道筋を提案した。

聴覚障害学生（吉川）の立場からは、聴覚障害学生は、「情報保障を自己プロデュースする」力を育むことが重要であると指摘した。自己プロデュースに到達する過程では、大学との対話が求められ、大学側から聴覚障害学生への、①支援体験を促す言葉がけ、②支援利

用の背中を押す言葉がけが有効である旨まとめられた。

教員（藤島）の立場からは、聴覚障害学生に考えるヒントを示す対話といったような、学生の成長面を意識した対話による教育的支援の視点を指摘した。この視点は、「共感し、ともに考える、創造的支援」と総称し、提案された。

支援とは、聴覚障害学生が社会的障壁に気づき、大学側に社会的障壁の除去を求める意思を表明してから開始される。ただし、聴覚障害学生の支援場面において、「困っている自覚はあっても、意思を適切に表明できない」といった課題が、事例的に報告されている（松崎，2018）。その理由には、聴覚障害学生が、意思をどう表明したらよいかわからなかったり、皆に迷惑をかけたくないという気持ちが作用したり、社会的障壁が存在する状況に持続的にさらされてきた中での適応的な行動であったり、支援に係る知識や支援窓口、支援手続きなどが不明確で諦めたりするといった、多様な事項が推察される。聴覚障害に示されるような、見えづらい障害ほど、このような様相が浮き彫りになるのかもしれない。これらの課題を解消する第一歩は、本企画により整理された「より質の高い支援を導く対話」にあることが窺えた。

本企画から、「対話」を基盤として実行される支援こそがスタンダードであるという認識をもつことの重要性が示唆された。聴覚障害学生の限られた在学期間に、聴覚障害学生の社会的障壁除去の要望の意思を明確化し、支援を実践していくことは容易ではないかもしれない。どうしたら全ての学生の学びの機会の平等を実現できるのか、「対話」を軸に、これからも問うていきたい。



図9 会場の様子（写真）

参考文献

- [1] 日本学生支援機構. 障害のある学生の修学支援に関する実態調査. (cited 2018-11-30), https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/2017.html
- [2] 松崎丈. 聴覚障害学生の心理とその支援. 聴覚障害者のメンタルヘルスとケア—適切なサポートのために—. 聴力障害者情報文化センター. 2018 ; 136-148.

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

「対話」がみちびく質の高い支援
ー聴覚障害学生支援のスタンダードを探るー

1

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

全体会の流れ

1. 講師紹介

2. 趣旨説明
聴覚障害学生支援をさらに充実させるために、
なぜ今「対話」に注目するのか？

3. 対話の例を見てみよう（支援面談の映像2本）
聴覚障害学生と支援担当職員との「対話」には、
何が求められるのか？

4. 全体ディスカッション／まとめ

2

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

1. 講師紹介

田中 啓行氏（たなか ひろゆき）
関東聴覚障害学生サポートセンター／コーディネーターの立場から

吉川あゆみ氏（よしかわ あゆみ）
関東聴覚障害学生サポートセンター／聴覚障害当事者の立場から

藤島 省太氏（ふじしま しょうた）
宮城教育大学／教員の立場・支援組織を運営する立場から

司 会

中津 真美（なかつ まみ） 東京大学バリアフリー支援室

3

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

2. 趣 旨 説 明

聴覚障害学生支援をさらに充実させるために、
私たちは、なぜ今「対話」に注目するのか？

4

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

障害学生支援の現状

平成28年4月「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（いわゆる「障害者差別解消法」）が施行され、障害学生の支援体制を構築、発展させる高等教育機関が増加している。

(校)

	平成19年度	平成27年度	平成29年度
専門部署・機関を設置	44	138	228
他の部署・機関が対応	997	948	878
対応部署・機関はない	189	96	64
全体の学校数	1,230	1,182	1,170

(日本学生支援機構)

今後、さらに聴覚障害学生支援を充実させるためには？

5

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

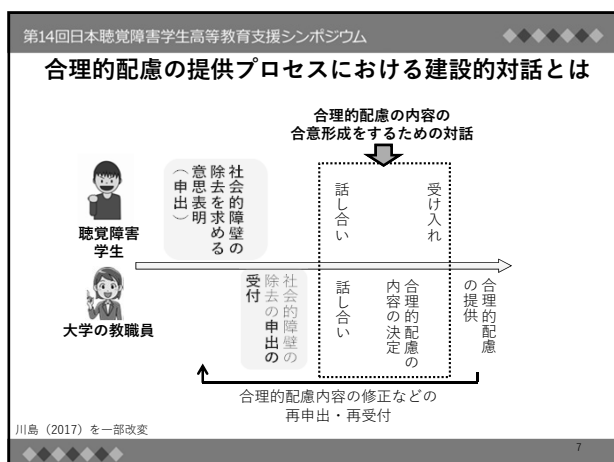
「障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針」では

合理的配慮は、

- 障害の特性や社会的障壁の除去が求められる具体的場面や状況に応じて異なり、多様かつ個性の高いものであり、
- 当該障害者が現に置かれている状況を踏まえ、社会的障壁の除去のための手段及び方法について、「過重な負担の基本的な考え方」に掲げた要素を考慮し、代替措置の選択も含め、
- 双方の建設的対話による相互理解を通じて、必要かつ合理的な範囲で、柔軟に対応がなされるもの

(内閣府)

6



第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

支援現場で起こり得る、聴覚障害学生が意思表示に至るまでの対話の一例

「何か困っていることは、ありますか？」

大学の教職員

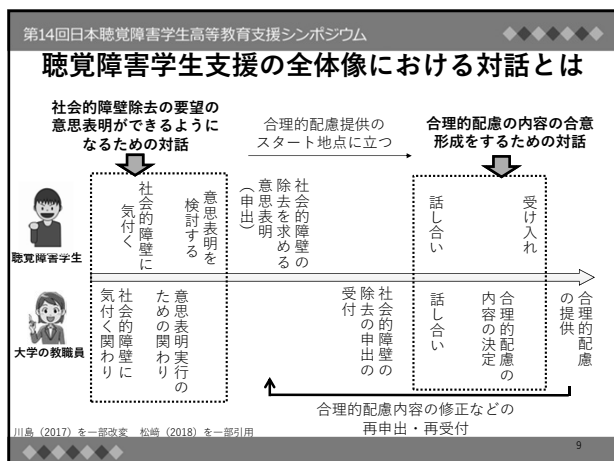
「だいたい大丈夫です。」

聴覚障害学生

- 高校の時のように、自分でやっていけるだろう。
- 困っているのだけど、どう話せばいいのか分からないなあ。。。

「困っていないと言うのなら、支援はしなくても大丈夫かな。」

「困っているようだけど、どうして言ってくれないのかな？」



第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

「対話」に注目

合理的配慮とは、聴覚障害学生と教職員との対話による相互理解を通じて提供されるべきものであり、このプロセスこそが大切。

今後、さらに聴覚障害学生支援を充実させるためには？

聴覚障害学生と教職員の双方が「対話」を重ね、つねにその時々々の支援ニーズを確認し、支援の最善策をともに検討し、合意形成していくことを支援のスタンダードと捉える。

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

「対話」とは何か？

- ① 聴覚障害学生支援に特有の「対話」の困難とは？
- ② 聴覚障害学生支援のスタンダードになり得る、より質の高い支援を導く「対話」の在り方とは？

「支援面談の映像」（2種類）を視聴しながら検討する。

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム


3. 対話の例を見てみよう

（支援面談の映像2本）

聴覚障害学生と大学の支援担当職員との「対話」には、何が求められるのか？


第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

「支援面談の映像」の設定



高橋さん
(聴覚障害学生)

聾学校を卒業し大学に進学。現在1年生。
聴者の学生と一緒に学ぶ環境は初めて。
入学当初の面談で「特に支援は要らない」と
言い、情報保障を利用せず授業を受けている。



大学の教職員

私立大学。障害学生支援の担当者がいるが、
聴覚障害学生の支援経験は少ない。
聾学校卒業生の受け入れは初めて。今後は
支援学生の養成や予算確保など、体制を整え
る必要性を感じている。

13

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

支援面談の映像1：支援は必要ないと言いつつも、困りごとがありそうな場面

意思表示できるようになるための対話
～合理的配慮の内容の合意形成をするための対話

必修の教養科目「社会学」の担当教員から、
「高橋さんはまじめな授業態度と相反して、小テストの成績がよくない。支援
は必要ないと聞いていたが、このままでよいのか？」と支援担当部署に連絡。

→支援担当職員2人が、高橋さんと面談することに。
高橋さんには、「最近の様子をききたい」と伝えて呼び出し、教員からの
連絡については伝えていない。

ポイント！

職員1が高橋さんに授業の様子を尋ねますが、特に
困った状況は話されません。
次に、職員2が高橋さんと話し始めます。どのような
対話が展開され、どのように高橋さんの要望が引き
出されていくのでしょうか。

※面談時のコミュニケーション方法は、大学側と高橋さんとで事前
に確認をし、意思疎通は十分に図ることができている設定です。
本映像では、口話と聴覚活用のほか職員2は手話も用いています。

14


第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

支援面談1の映像を視聴（約5分）

15

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

支援面談1の映像 講師コメント



16

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

ポイント！コーディネーターから

●コーディネーターとして目指すことは
「学生が困っていることの正確な把握」

⇒そのためにどうしているか？
職員1：用意した項目を一つ一つ確認

職員側が知りたい
ことをYes/Noで聞く
「問診票型」

【問題点】
学生にYes/Noを
判断できるだけの
経験がまだない

職員2：さまざまな角度から質問して学生の状況を確認
聴覚障害学生自身に語らせる
「診察型」

①感情・感覚に
寄り添う質問

②困難特定の
手がかり提示

③支援への肯定的
雰囲気醸成

17

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

①感情・感覚に寄り添う質問

授業楽しい？

学生の感情に寄り添う質問
⇒自分の気持ちを話してもいいという
雰囲気を作る

内容が難しいけど、理解したら楽しい
かなって思います。

自分で聞くのは大変だなって
思うことはない？

困りごとによって生じるであろう
感情を問う

困っている状況を
回答

先生が見つからない時とか、先生
から「あとで」って言われたとき
は大変だなって思います。

18

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

② 困難特定のがかり提示

聞くのが大変な授業と、まあまあわかりやすい授業があると思うけど、何が一番大変？

具体的な状況の提示

板書をしない講義がいくつかあるんですが、頑張って聞くので、終わった後すごく疲れます。

板書がない授業って、たとえば？

授業の特定

社会学とか法律学とか、教養科目の授業は話が多いので、わかりません。

19

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

③ 支援への肯定的雰囲気醸成

そうだね、困ってるよね。どういう方法があればいいと思う？

困難点の解決方法を学生自身に考えさせる

前は要らないと言った、筆談みたいなのはあったほうがいいと思うようになりました。

初めに断ってしまったから、またお願いすることはできないのかなと思って……。

いいよ、べつに（笑）

支援を利用することの心理的負担を和らげる

20

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

ポイント！当事者から

食事に例えると……

カレー食べたことない……	通訳つけたことない……
「別に食べなくていい」	「なくても大丈夫」
「見た目も匂いも……」	「ちょっと面倒……」

↓

実物と接する言葉かけ

21

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

食事に例えると……

カレー食べてみようか？	通訳つけてみようか？
「おいしいよ」	「楽しいよ」
「一口食べてみない？」	「一回試してみる？」
「〇〇と混ぜてみたよ」	「〇〇の授業はどう？」

↓

背中を押す言葉かけ

22

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

ポイント！教員から

- 漠然とした質問は答えづらい
- 困難感を訊き出そうとするとかえって答えづらい
- 共感的態度で相手の感情に訴える言葉かけ
- 相手の立場に立った聞き方
- 比較対象の提示⇒答えやすい
- 共に考える姿勢を示す⇒具体的支援の提案
- 気づきの尊重

学生の経験値に対する配慮

マニュアル的な問い

カウンセリングマインド

考えるヒント

協同作業

23

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

【職員1】

どうですか？どんな感じ？

問題を見つけ出そうとしているが漠然とした問いになっている

困っていることはありませんか？

本当に困っていることはないですか？

だいたい大丈夫です。

【職員2】

楽しい？

自分で聞くのは大変だなんて思うことはない？

共感的な態度

そうだね。さびしくなるよね。

はい、さびしいです。

困ってるよね。どういう方法があればいいと思う？

具体的方法の提起

筆談みたいなのは、あった方がいいかな

24

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム


支援面談の映像2：支援利用から2週間が経ち何か思うことがあるような場面

合理的配慮内容の修正の意思を表明できるようになるための対話
～合理的配慮の修正内容の合意形成をするための対話

前回の面談後、高橋さんは、支援学生による手書きノートテイクとパソコンノートテイクを利用して授業を受けるようになった。
支援を利用しはじめて2週間が過ぎ、様子を確認するための面談を設定した。

ポイント！

職員1は、高橋さんとの対話に慣れ、支援の様子を聞きだしていきます。高橋さんは、パソコンノートテイクに対して、何か思うことがあるようですがうまく表現できません。
職員1と職員2は、どのような対話をして高橋さんの困りごとを特定し、具体的な対処につなげていくでしょうか。



25


第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

支援面談2の映像を視聴（約5分）

26

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

支援面談2の映像
講師コメント



27

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

ポイント！コーディネーターから

- コーディネーターとして目指すところは「学生が困っていることの正確な把握」
⇒そのためにコーディネーターのほうから具体例を出して質問している
職員1：具体例のパターンが乏しい
職員2：具体的な困難点の例をさまざまに提示しながら、聴覚障害学生の発言内容を掘り下げている
- 職員2はさらに利用学生としての成長をサポートしようとしている
⇒利用学生としての動き方をそれとなく示したり、その動きをサポートすることを伝えたりしている

28

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

具体的な困難点の例を提示する

たとえば、話の流れがわかりにくいとか？

先生が言っている内容と支援者が打っている内容がずれていて、なんとなくついていけないなあっていう感じ？

文が繋がっていないのかな？

これまでの経験などから、さまざまな具体例を提示
⇒経験が浅いコーディネーターも他大学の事例を収集することなどで可能なのでは？

29

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

利用学生としての動き方を示唆し、サポートする

わかった。支援者さんには、もうちょっとこうしてほしいって言った？

自分から支援者に要望を伝えたほうが良いということをそれとなく示す

「もっと打ってくれますか」と言って「OK」と言ってくれたけれど、入力中に黙るというか、まとめようとしている感じがしたから、その分ずれてるのかなって。

わかった。じゃあ支援者には、まとめようとするよりは、できる限り打つように、こちらからもアドバイスしたいと思います。

コーディネーターも利用学生の動きをサポートする

30



第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

ポイント！当事者から

調理に例えると・・・

一緒に作ってみようか？	一緒にやってみようか？
「どんなカレーにする？」	「どういう通訳がいい？」
「人参を洗って切って」	「先生にも聞いてみて」

↓

イメージを相談・共有

31

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

調理に例えると・・・

自分で作ってみる？	自分でやってみる？
「どうやって作る？」	「どうやって進める？」
「やってみようか」	「やってみようか」

↓

プロセスを相談・共有

32

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

めざすところは・・・

自分で「料理ができる」ようになる

↕

情報保障を「自己プロデュース」する

33

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

ポイント！教員から

- 支援開始後の成果⇄肯定的答えの誘導
- 被支援者の立場⇄個々のテイカーへの批判はしにくい
- 技術面に対する評価

成果を急がない

学生同士の気持ち

学生はプロではない

- 問題の明確化（具体例の提示）
- 具体的な支援の提案
- 代弁者としての機能（緩衝材的役割）

問題発見のプロセス

具体的提案

コーディネーターの立ち位置

「共感し、ともに考える、創造的支援」

34

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

【職員1】

よかったとか、あります？スムーズに受けられてる？

成果を急ぎ過ぎ

【職員2】

やってもらってよかったと思いました。そこまで困らないです。

授業によって差があったりしないですか？

もやっとする原因はわかる？

うーん、わかんないですね。

35

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

【職員2】

伝わったって感じがあんまりない？話の流れがわかりにくい、先生が言っていることと内容がずれて・・・

問題点の掘り起こし

できれば先生が言ったことをそのまま打ってくれたら・・・「わかったわかった！」となると思う。

こちらからもアドバイスしたいと思います。

緩衝材的役割

36

前日特別企画 報告



「当事者研究をやってみよう！」ワークショップ報告

松崎丈¹⁾，綾屋紗月²⁾

宮城教育大学 特別支援教育講座¹⁾，東京大学 先端科学技術研究センター 当事者研究分野²⁾

1. はじめに

「当事者研究」を取り上げる本企画は、我が国の聴覚障害学生支援分野において初めての取り組みになる。当事者研究は、「障害や問題を抱える当事者自身が自らの問題(困りごと)に向き合い、仲間とともに研究すること(石原, 2013)」である。そこには、自分自身について新しい言葉や知識を発見する側面(discovery)と、それを通じて何らかの生きやすさがもたされる側面(recovery)を持っている(熊谷, 2017)。ここでは「困りごと」は、当事者研究において欠かせない貴重なテーマとされており、当事者研究は観察・仮説・実験・共有といったプロセスを経て行われる(綾屋, 2018)。

聴覚障害学生支援においては、「社会的障壁の除去」、「意思の表明」及び「合理的配慮の提供」をめぐる「対話」の場面で支援者や専門家からのアプローチに加えて当事者研究を取り入れた聴覚障害学生からのアプローチで支援体制の改善や向上につながることが期待される(松崎, 2019)。そこで本企画では、聴覚障害学生を対象に、当事者研究の目的や手法を学ぶとともに、「聴覚障害」に関する困りごとをテーマに「当事者研究」でどのように進めるのかをワークショップを通して理解することを目的に実施した。

2. 本企画の内容

2.1 本企画の内容や進行に関する検討

本企画は、初めての取り組みであり、当日の所要時間が3時間と決して長くはないため、参加する聴覚障害学生がいかに当事者研究のエッセンスを共有し、かつ実践技法を自分に必要なものとして所有できるためにどのような内容や進行にするかが重要な検討課題であった。本企画のような内容に取り組むことを考えている方々の参考にといい、検討の結果を少し詳しく報告する。

当事者研究には、「観察・仮説・実験・共有」の4つが含まれたプロセスがある。短時間でかつ当事者の生活から離れた場所で行うため、上記プロセスのうち「実験」の検証まで実施するのは難しい。そこで本企画では、最初のガイダンスで当事者研究の目的・手法について概説し、ワークショップで当事者研究の対象となる「困りごと」の「観察」から始めて、「仮説」「共有」「実験計画」までを行うことにした。これらの工程の全体像が把握できるようにワークシートを作成することにし、綾屋が当事者研究の初心者向けに作成した教材をベースに本企画の趣旨にあわせて一部加工したものを使用した(図1)。テーマの設定については、従来の当事者研究は大きく2つの方法で行っている。1つは全員が共通のテーマについて議論を進める方法、もう1つは1人1人がそれぞれの困りごとについて探る方法である。今回は全員共通のテーマとして「大学における聴者とのかかわりかた」



をとりあげた。ただし、全員参加型で議論するのは時間の関係上厳しいため、4人グループ内でワークシートに記述し、その内容を読んで議論してもらう方式を選択した。さらにワークシートの記述についても工夫してある。例えば、上記テーマのエピソードを記述する場合は、二人一組になって一方の参加者がもう一方の参加者にエピソードの時間、場所、感覚、気持ちなどを具体的に質問し、聴き取りながら記述する方法をとることで、これまで考えたことがなかった角度で自らを振り返り、自分に関する新たな発見が引き出され、独りよがりになることなく、他者との間で生み出された伝わりやすい言葉によるエピソード記述がなされることを目指した。このように検討して当日を迎えた。参加者からグループ内で話し合う時間がもう少し欲しかったとの指摘が出されたが、聴覚障害学生を対象にした当事者研究ワークショップを今後も行う上で1つのパッケージとして提供可能な形にすることはできたと思われる。当日の進行の詳細については表1を参照されたい。

<p>前日特別企画：聴覚障害学生企画 当事者研究ワークシート</p> <p>研究員名 <input type="text"/></p> <p>©2012 当事者研究のやり方研究会 Created by 徳島県立（東京大学聴覚障害学生研究センター当事者研究分野）</p> <p>研究テーマ 「大学における聴者とのかわりかた」の当事者研究</p> <p>1. 今回のテーマで印象的なエピソードを記入 どんな時に？/どんな場で？/どんな風に？ ⇒「時間」「場所」「感覚・身体の状態」「動作」「気持ち」を具体的に特定</p> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div>	<p>2. 思考のパターン（考え方・行動） [記録表]</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> </div>
<p>3. 仲間からのコメント欄</p> <p>①自分も似た経験をしたことがあれば、その経験について（経験の共有） ②自分が似た経験をしたときにどんな対処法をとったか（自分助けの共有） ③質問</p> <div style="display: grid; grid-template-columns: 1fr 1fr; gap: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; height: 60px; width: 100%;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 60px; width: 100%;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 60px; width: 100%;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 60px; width: 100%;"></div> </div>	<p>4. 実験計画 明日からでもすぐに試せるようなハードルが低く、具体的な行動を考えてみよう</p> <p>5. 実験報告 失敗も貴重なデータ 実験結果も書きとめておこう</p> <div style="display: grid; grid-template-columns: 1fr 1fr; gap: 5px;"> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> <div style="border: 1px solid black; height: 100px; width: 100%;"></div> </div>

図1 当日配布した4枚のワークシート

2.2. 当日のワークショップの様子

当日は15名の聴覚障害学生が参加した。参加申込の段階で事前のレポート課題として、「大学における聴者とのかわりかたについて自分が苦労していることは何か」を400字程度で記述することを求めていた。そのため自分の苦労について他者に自己開示できる学生が集まったおかげで、グループ内の話し合い活動は終始賑やかに行われていた。

図1の2～4の欄について参加者が記述した内容を見ると、2と3では、他の参加者の聴き取りによる記述をしてもらったおかげで、困りごとの発生状況やそのパターンが個別具体的に把握できる内容として外在化されていた。2と3の内容を分類すると、集団での雑談やグループワークで音声情報が把握できず様々な心理状態から抜け出せなくなってしまうこと(10名)、音声で明瞭に話

すために相手は聴き取れると思って音声だけで話しかけてきてしまうこと(2名)、作業中に相手が音声で話しかけてくるために音声情報が把握できなくなってしまうこと(1件)、手話がわかる聴者の友人が手話をつけて話す時とそうでない時があって対処に困ってしまうこと(1件)、聴力の不快レベルが低いために大きな音が発生する授業では心身不調を起こしてしまうこと(1件)が挙げられた。これら困りごとに対してワークシートの「3. 仲間からのコメント欄」では、グループ内の他の参加者同士、類似する経験や対処法などのコメントを記述し合い、お互いに共有した。



図2 ワークの様子(写真)

これら困りごとの分析結果に基づいてワークシートの「4. 実験計画」では、日常生活ですぐに試みることが可能な実験を各自検討してもらった。本来なら、困りごとの分析結果と実験計画の検討とのつながりが見えるように個々の研究内容を述べた方が当事者研究のプロセスが把握できると思われるが、紙面の関係上割愛させていただく。実験計画の内容について綾屋による分類によると、参加者は2つの視点で実験計画を検討していることがわかった。

第一の視点は、自分の行動を変化させるものであった。これについて具体的には、①自分自身の態度を工夫する(7件)、②尋ねる(5件)、③聞こえの特徴を伝える(5件)が主に挙げられた。①の例としては、わかったふりをしない、作り笑いをしない、疲れた時一人になる、など。②は、「なんて言ったの?」「もう一回言って」と言える勇気をもつ、わからなくなった時に自分から気持ちをはっきり伝える、など。③は、初対面のときから聞こえないことを伝える(長い付き合いになると後からは言いづらい)、自分の聞こえ方を積極的に伝える、など。

第二の視点は、相手や場に変化を求めるものであった。具体的には、①対話方法の工夫・場のルールを変更する(10件)、②筆談を依頼する(4件)、③はっきり話すように依頼する(3件)、が挙げられた。①の例では、グループワークの発言は一人ずつにしてもらい、「手話使って」と言う(手話ができる聴者が手話を使っていないとき)、自分から特定の人に話しかけて誰が話しているのかわかるようにする、ゼミの仕切り役(ムードメーカー、世話役)になって自分のペースに持ち込む、実験中に説明されても見ることでできないため一度作業を止めて話を聞けるようにしてもらい、「なぜ手話があり、なぜ手話を使うのか」を手話サークルのみんなと考える場を作って伝える、など。②については、ホワイトボードあるいはブギーボードに書いてもらう。③については、「大きな声でゆっくり」ではなく「ハキハキ綺麗に」と伝え方を工夫する、グループワークの前にゆっくりはっきり話すように依頼する、担当教員に大きめにはっきりした声で話すように依頼する、であった。

最後に「5. 実験報告」では各自大学生活に戻って実践してみてどうだったかを記述するように依頼し、ワークショップを終了した。

3. 本企画の成果と今後の課題

本企画の最後に参加者全員に今回の内容について感想を語ってもらった。例えば、「聴覚障害

に対する情報を共有する最高のツールになると思った」「これまでモヤモヤしていたが、今回の企画でそれを自分で言語化してみても発表することができて良かった」「皆さんの実験計画を聞いてこれからの生活で自分の武器になるものが得られた」「今までは自分一人で解決していたが、今回は自分の経験を他の人が尋ねることで自分の考えを客観的に見ることができて良かった」などがあった。参加者全員、当事者研究が自分を守り、他者と共有するツールとして有用であり、しかも面白い取り組みであることを実感したようである。従来、聴覚障害学生支援において聴覚障害学生が主体となって取り組む機会は限られ、受身的な姿勢になりがちであった。今回の企画の成果からは、当事者研究の導入によって、聴覚障害学生が様々な困りごとや実験の結果を提供する「主役」として能動的に活動でき、結果的に大学の教職員や支援者とのつながりも深まる可能性が期待できるかもしれない。今後とも聴覚障害学生の当事者研究の実践の場を提供していければと考えている。



図3 説明する筆者（写真）

参考文献

- [1]石原孝二(2013)当事者研究とは何か-その理念と展開. 石原孝二(編)当事者研究の研究. 医学書院, 12-72.
- [2]熊谷晋一郎(2017)みんなの当事者研究. 臨床心理学増刊, 9, 2-9.
- [3]綾屋紗月(2018)当事者研究の誕生・目的・実践. 聴覚障害当事者研究シンポジウム資料集, 3-10.
- [4]松崎丈(2019)聴覚障害学生支援における合理的配慮をめぐる実践的課題. 宮城教育大学紀要, 53, 255-266.

表1 本企画ワークショップの進行表

時間	プログラム	内容
13:00 (20分)	ガイダンス	講師紹介・目的など
13:20 (20分)	当事者研究 ワークショップ	ワークシートの「1. テーマに関する苦労のエピソード」の記入方法を説明(4分弱)。グループ内で二人ペア(※奇数の場合は講師が入る)を作って、お互いに相手の話を聴き取って書き込む。(8分×2人)
13:40 (20分)		ワークシートの「2. 苦労のパターン(考え方・行動)」の記入方法を説明(4分弱)。また同じペアでお互いに聴き取って書き込む。(8分×2人)
14:00 (20分)		ワークシートの「3. 仲間からのコメント欄」の記入方法を説明(4～5分弱)。 グループ内で全員分のワークシートを回覧し、お互いの苦労の内容やパターンを共有 「3. 仲間からのコメント欄」に以下のいずれかを(時間の許す範囲で)記入する ①自分も似た経験をすることがあれば、その経験について(経験の共有) ②自分が似た経験をしたときにどんな対処法をとったか(自分助けの共有) ③質問 (5分×3人(人数が増えたら4分×4人など調整))
14:20 (10分)		ワークシートの「4. 実験計画」の記入方法を説明(4分弱)。 (※「5. 実験報告」は後日記入するように説明)。 「3. 仲間コメント欄」を参考に自分自身で書き込む(6分)。
14:30 (10分)	休憩	
14:40 (45分)	発表	全員が各2分ずつ発表 (※各発表ごとに質疑応答1～2人+交代時間を含め、実質3分×15人)
15:25 (10分)	フィードバックと総評	講師2名より総評
15:35 (15分)	ふりかえり	全員が一言ずつ感想(その場に気持ちを置いていく)(1分×15人)
15:50 (5分)	時間調整用	
15:55	諸連絡	諸連絡



「作ろう支援の大三角—みんなの視点を対話でつなぐ—」 ワークショップ報告

杉中拓央¹⁾，志磨村早紀²⁾，黒田泰²⁾，秋元麻²⁾，川口雅史³⁾

小田原短期大学¹⁾，早稲田大学障がい学生支援室²⁾，
株式会社スポーツ IT ソリューション³⁾

1. はじめに

本ワークショップは、グループディスカッションをとおして、聴覚障害学生支援を構成する当事者の学生・支援者（学生）・担当教職員のそれぞれが、三方の視点より、日頃感じていること、思っていたけど言えなかったことを話し、よりよい支援を考えることをめざした。本稿においては、ワークショップの内容の報告ならびに、参加者からの感想を中心として報告を行う。

2. 内容

聴覚障害学生支援の特徴を「星座の大三角形」になぞらえ、立場の異なる三者の力を合わせるという意味を持たせたワークを行った。具体的には、照明を落とした会場に、参加者の氏名を配した天体図を投影し、それを見ながら星座を模したグルーピングに沿って集合することを求めた。開始直後は戸惑いも見られたが、じきに一人、二人と手が上がり、手話や筆談を交えながら自己紹介が行われ、求められたグループに着席していった。

グループごとの着席後は、アイスブレイクとしてチーム名の決定に移った。各チームは6名程度で事前に編成し、必ず聴覚障害学生・支援担当学生（以下、支援者）・支援担当教職員のすべてを含む編成とした。まず、チーム名として「架空の大学名」を命名して頂き、次いで、その「校訓」を設定してもらった。そして、チームごとに氏名と（本当の）所属大学名を名乗ったのち、手話・筆談使用の有無、人工内耳装用の有無等の情報交換をしつつ、模造紙に書き込んでいく様子が見られた。なお、当日は手話ならびに文字通訳を行う情報保障支援者の派遣を頂いていたが、グループ内でのコミュニケーション上の課題は参加者間で解決をはかる、という取り決めのもとで進めた。

参加者同士が打ち解けてきたところで、くじ引きタイムに移っ



図1 写真（自分の仲間を探して着席）



図2 写真（「アオマル大学」の模造紙）



図3 写真（くじ引きおにさんから事例を受け取る）

た。各講師が日頃の支援活動や業務、調査研究をとおして実際に接した「聴覚障害学生支援の課題」12事例を挿絵つきのボードにしつらえて、各チームの代表者に引いてもらった。そして、引き当てたものを、各チームでの議論のテーマとした。事例の一部を紹介すると「聴覚障害学生が（支援時に）自分の書いているノートや、打っている画面をほとんど見てこない。私はいなくてもいいんじゃないの?」、「支援者が先生と勝手に話を始めている…何を話しているのか分からないし、どうしよう」、「障害学生に「これで大丈夫?」と聞いても「大丈夫」としか言われないので、どうしたらいいのか分からない」など、参加者の支援活動にかかるキャリアの深浅に配慮しつつ、イメージのしやすい内容を用意した。

この事例を用いて、30分間のディスカッションを行ったのち、発表タイムへと移った。発表はグループごとに代表を立てる形で行ったが、結果として聴覚障害学生・支援者・担当教職員がそれぞれ意見を述べる機会があり、立場の違う参加者の発表に対して、熱心にメモを取る姿も見られた。発表が一巡したところで小休憩に入り、ここまでを1セッションとした。

休憩後、グループ編成は変更せずに、上述のセッションをもう一度繰り返す形をとった。用意された12事例のうち、残りの6事例が再度くじ引きによって配当された。2巡目ともなると、グループ内においても話し合いが活発になり、模造紙に貼られる付箋の数も増えていった。当日の雰囲気や、話し合いの成果を示すものとして、参加者から頂いた感想を次節に掲載したので参照されたい。

残りの時間はファイナル・ディスカッションと銘打って、フロア全体によってワークショップを振り返り、立場の異なる三者が協力しての、よりよい聴覚障害学生支援の実現について話し合いを行った。

まず、支援担当教職員の立場から、所属チーム内において扱った事例「聴覚障害学生が要約筆記の様子を注視しないことに対する支援学生の葛藤」について言及があり、支援学生が常時、真摯に学習に取り組むことを期待してしまう背景には、障害者に対する「べき論」の介在があるのではないだろうか、とした。この指摘を呼び水として、聴覚障害学生



図4 事例ボード（事例の内容を端的に表す挿絵（協力：逸村理）を用いた）



図5 写真（発表は書き込んだ模造紙に加え、参加者の実体験等を交えながら行われた）



図6 ファイナル・ディスカッションでは、それぞれが日頃感じていることが本音で語られた。

の立場からは、聴者と同じように面白くない授業は眠たくなるし、実際に寝てしまう、との発言があった。他方で、支援時間外にも交流のある同窓の支援者に気を遣って（情報保障支援の）画面やスライドを見たり、首を大きく振ったりしているという打ち明け話もあり、支援室内で、こうした課題について話し合いを行い、理解を求めていきたいとした。

支援室内における話し合いについては、聴覚障害学生や支援者がいずれも手話を使わないためか、あまり相互の交流がされていないという大学から相談があった。これに対しては、いくつかの大学から、手話（コミュニケーションモードの相違）に限った問題ではなく、課外活動等を企画して、関係性を深めてみてはどうかと助言がなされた。

3. 参加者からの感想

ここでは、ワークショップ参加者からの感想を三者の立場別に報告する。

【聴覚障害学生】

- ・周囲の目を気にしてノートテイクなどの支援側に協力することに抵抗があったが、実際にグループの支援学生やコーディネーターなどの本音や意識を聞いて、当事者である自分が思っている以上に悩んでいると実感した。
- ・様々な大学、様々な人の考えに出会うことができ本当に良かった。自身では気付かなかった部分が多くあったり、やっぱりみんな抱えている悩みは同じなんだと思った（略）。
- ・自分と同じ悩みを抱える障害学生もいて、悩みを共有できて良かった。三者間のコミュニケーションを醸成していくことが大事だと改めて感じた（略）。
- ・自分の障害学生としての思いを伝えるとともに、普段なかなか聞くことのできない支援学生、教職員の意見を聞くことができて良かった。
- ・普段支援を受けている立場として、支援学生や職員の方から見た障害学生のイメージを知りたくてワークショップに参加した。「当たり前」の考え方に固執せず、様々な視点で柔軟に対応していく必要があると改めて感じさせられた。



図7 写真（ディスカッションの様子）

【支援学生（支援者）】

- ・今回の企画は「あーあるある！」と共感できたこともあれば、「参考にしたいなー」と思える意見、また今後学生支援の行動自体のモチベーションとなるものもあった。
- ・今まで自分の大学の支援状況しか知らなかったのも、大学によって支援の仕方・考え方が異なることを改めて感じた。初対面の人が多く普段立場上話しにくいこともフラットに話すことができ新たな発見になった。このような場を自分の大学でも作れたら。
- ・もっと支援について考えていこう、手話をがんばろうと思える良い機会になった。
- ・グループが上手く分かれていて様々な意見が出て新たな発見があった。課題も親近感の

あるもので話しいががあり、考えさせられたり盛り上がってとても楽しかった。

- ・身近な気がしていた利用学生がどのような事を考えているのか、今まで知らなかったことに気付けた。相手へのリスペクトがとても大切だと再確認しました。
- ・支援学生／障がい学生という立場に分かれてではなく、自分／相手、人と人としての関係を築けることが理想。今の支援がベストと思わず、常にハングリー精神を持ち続けたい。
- ・障がい学生や教職員の方々とこれほど身近に話す機会は今まで無かったので、新しい視点からの考え方を知ることができた。テーマも身近なものでとても話しやすかった。
- ・お互いが溜め込まずに話し合い、コミュニケーションを取ることが大切だと感じた。
- ・自身の大学にも持ち帰って、色々な人に考えてもらう機会をつくりたいと思った。
- ・ほとんどの課題解決策にコミュニケーションが関わっていると感じた。人と交流する機会を自分で積極的につくっていくことが重要だと思った。
- ・これまで自分の大学内での問題だけを考えていたが、今回参加して大学ごと、学生ごとに様々な支援の形があることに気付いた。
- ・ワークショップを通じて、自分が考えていることは意外と共通認識なんだと感じた。

【教職員】

- ・支援者、障がい学生という立場（役割）をどれだけ活用しながら（させながら）、合理的配慮を提供し“学生”に戻していくのか、とても考えさせられる企画になりました。
- ・様々なあるあるの事例をもとに、利用学生、支援学生、コーディネーターが一同に集まって行うワークショップの手法に感銘を受けた。（略）中身の濃い時間だった。
- ・支援する、されるという立場の違いからか、タブー視されているような部分に踏み込んだテーマがあり、学生にとってスッキリする部分もあったかと思う（略）。
- ・意欲にバラツキのある学内で、今回の企画もヒントにしながら取組みをしていきたい。
- ・三者の立場を意識した設定により、別の視点に気付かされて大変良かった。
- ・すばらしいディスカッションで、時間も余裕があり尻切れトンボにならずに良かった。
- ・三者の立場から物事を考え、他大学の教職員、学生と触れ合うのはとても勉強になった。
- ・三者の立場でテーマ毎に議論できて良かった。学内のFD/SD研修のヒントとしたい。
- ・立場の違いはあれど、結局は人と人との付き合いということをベースにして考えていかなければならないことを改めて認識した。

4. 講師からの感想（まとめにかえて）

最後に、本ワークショップを担当した講師それぞれからの感想を記したい。

杉中／参加者同士が初対面であり、その対話手段も様々で、かつ各々の支援経験にも差があるという条件下においての開催は想像もつかず、ドキドキしましたが、始終和やかに進



みました。参加者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



こうしたワークショップを開催すると、おおかたは「コミュニケーションが大切」というところに帰結するのですが、そこから一歩進んで「相手の居る世界に思いをはせる」ことの大切さを知る機会になればと考えました。例えば、聴覚障害学生は支援者に、あるいは担当教職員になりきって、相手のカメラワークで、その眼に映る自分の姿を想像してみる。ちょっとわがままを言っているかな？ 相手の言い分はこんなのかな？ と、いろいろ見えてくるものがあると思います。そして、それを胸の内にしまわず、言葉に表して相手に伝えることも大切ですが、いきなりビシッと投げかけるよりは、相手がどうやったら捕球できるのかを第一に考えて、まずは山なりの言葉で臨みたいですね。このことは、支援者や教職員も例外ではなく、人は誰しも偏りがあってしかるべきなので、コミュニケーション上いつときありえん、理解の範疇を超えている…という事態に接したとしても、どうしてなのだろう？と、前向きに受けとめたいものです。

志磨村／今回のワークショップで、障害学生・支援者・教職員の三者が意見を交わす場を、大学の垣根を超えて設けることができたことに大きな意義を感じています。初対面同士のグループディスカッションは、最初こそ、やや緊張した雰囲気も漂っていましたが、支援という共通項を持ち合わせた者同士、次第に活発な議論を交わして



いく様子を見て、普段、自身が感じていることを吐き出しやすい面もあったのではと思いました。また、各グループの発表では、事例に対する三者それぞれの悩みや見解について、他の参加者が深く頷く様子が見受けられ、聴覚障害学生支援の現場における課題には大学間で共通するものがあることを再認識しました。解決策は簡単には見いだせませんが、三者それぞれの立場が自分の考えを持ち、それを述べ、受け入れ、互いを知る、という機会を作ることから、より良い支援を構築する道は始まると考えています。一方で、こうしたワークショップの参加者は、普段から支援に対する問題意識を持っていたり、それをどうにかしたい、という気持ちを持ち合わせた、熱量の高い人々が大半を占めると思っています。だからこそ今回のワークショップも議論が活発化したのだと思いますが、支援の現場における構成員は、必ずしも皆、高い熱量を有しているわけではないということもまた、事実だと思います。なんとなくモヤモヤするけれど、うまく言語化できずに過ごしていたり、支援との距離感がやや遠かったり…と様々な立場の人がいるでしょう。そうした人々も巻き込んで、「じゃあ、どうしようか」と考えるきっかけが、それぞれの支援の現場で求められているのではないかと考えます。そのためには、三者それぞれの立場が、一同に介する場で意見を言い合うことも良いですが、時には、一人ひとり丁寧にヒアリングし、心情を汲み取ることも必要だと思います。これが、支援に携わる教職員の役割の1つなのではないでしょうか。

今回のワークショップで得られたことを、参加者がそれぞれの現場に持ち帰り、何か 1 つでも活かせるものがあれば、と思います。聴覚障害学生、支援学生、教職員それぞれが、気持ちよく支援に携われるよう、支援の現場がこれからも日々アップデートされていくことを願います。



黒田／今回のワークショップで、ほとんどのグループから出た共通意見が「コミュニケーションの大切さ」でした。聴覚障害学生と支援者または担当教職員など関係性の違いはあれ、突き詰めるとお互いに思いやりの気持ちを持ち、汗をかきながら両者の人間関係、コミュニケーションを深めていくことが全ての課題解決につながることを再認識しました。私は普段、発達障害学生支援部門で学生支援に携わっており、身体障害学生や支援学生と接する経験は非常に少ないのですが、発達障害とは障害種別は違えども、課題や解決のための糸口は共通して存在することに気付かされました。

もうひとつの気付きは学生同士による支援の大切さ、重要性の再認識でした。活発な議論の中で聴覚障害学生からも支援学生からも、普段の支援や交流を通じて得られた溢れ出る気力や自信を感じました。現在、発達障害学生の支援では教職員による支援や配慮が中心で、支援学生に協力を求めるケースはほとんど存在しませんが、発達障害学生についても要約筆記など学生支援の機会を増やすことや、発達障害学生も身体障害学生の支援に積極的に参加することが、彼らの自己理解や自己肯定感を涵養していくうえでも重要であると感じました。

秋元／ワークショップの開始前は、各参加者の支援に関わる経験の差などが多少憂慮されましたが、いざワークショップが始まってみると、リードする人あり、フォローする人もあり、自然と活発な意見交換がなされていました。



支援に携わる聴覚障害学生、支援学生、教職員の三者が一同に会し、日頃の疑問や悩みを共有する場は、意外に少ないものです。ふだんは遠慮が働いて言いにくいこと、支援の前後に時間がなくて話せずじまいになっていることもあります。が、「場」があるだけでそうした意見を交換し合うことができるのだということに、改めて気づかされました。また、「はじめまして」の人が多くことでフラットな雰囲気がつくられ、「あるある」のお題が用意されていたことも、議論を活性化させる一助となっていたように思います。参加者それぞれが、立場や大学を異にする人の意見に熱心に耳を傾け、共感したり、発見したり、学んでいる様子を見て、今回のワークショップが意義深いものであると感じました。また、私自身もみなさんの支援に対する意欲や関心の高さ、内省的な姿勢に驚かされ、刺激を受けました。

支援の現場で出てくる疑問や悩みの多くは、自分の内だけで解決できることではなく、人



と共有することで解決し、解消していくものだというのを再認識しました。参加者のみなさんにとっても、それぞれの思いや考えを共有することについて、より肯定的に捉えられる機会になったのではないのでしょうか。支援に携わるより多くの人を巻き込んで、それぞれの大学で支援の大三角を作っていただけたら、嬉しく思います。

川口／今回は、利用学生、支援学生、そして両者をコーディネートする支援室職員という三者が一堂に会してディスカッションを行うという機会でした。私自身、支援学生としての支援への関わりということは学生時代から数多くありましたが、実際に利用学生や支援室職員としての支援に対する思いや、日ごろ困っているといったことを直接耳にする機会はあまりなかったため、ディスカッションがどこまで盛り上がるかといったことについては未知数であり、実際にワークショップが始まるまでは非常に不安でした。



ワークショップが始まると、最初は各グループ自己紹介に始まり、自分の普段支援に関わる立場の話を始めていて、不安が期待に変わり始めました。そして、各グループに与えられた題に対応して、ディスカッションを行っていましたが、私たち講師陣が思っていた以上に、支援に関わる当事者たちが、それぞれの立場からの話を普段思っていること、疑問などを当事者に対して伝えたり、ぶつけたりすることで、非常にディスカッションが盛り上がっていました。

最後の感想においても、普段考えていないことを考えるきっかけになったといった意見を目にすることができ、各当事者が支援に対して再考する機会を作れたということは貴重な体験になったのではないかと考えています。このワークショップを通して、私自身も支援に対して今までとは違う視点の気づきを得ることができ、とても勉強になりました。

「支援体制整備のその先にある課題とは？」ワークショップ報告

白澤麻弓¹⁾

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター¹⁾

1. はじめに

障害者差別解消の施行にともない、多くの大学で障害学生への支援体制整備が進められている。この結果、ノートテイクやパソコンノートテイクの配置といった、いわば一般的・標準的な支援については、広く共有されつつある。一方でこうした支援手段の提供のみでは解決できない問題も多数あり、支援体制が一定程度整備された今だからこそ見えてきた課題があるのも事実だろう。

本ワークショップでは、こうした課題のうち、事前アンケートで複数の大学より提示された以下の課題を取り上げ、ディスカッションを行った。

- 1) 利用学生自身が授業に遅れてくる、支援を利用する気がない、支援について誤解しているなど、「聴覚障害の特性」に端を発する問題
- 2) 英語のリスニングやアクティブラーニングの中でのグループディスカッション、資格取得のための実習など、「授業の特性」に端を発する問題

これらの問題を解決するためには、それぞれ「聴覚障害の本質」と「教育の本質」に立ち戻り、議論を深めることが重要と考えられた。以下、本ワークショップで行われた議論について、概要を報告する。

2. 「聴覚障害の本質」と聴覚障害学生支援

議論に先立ち、群馬大学金澤貴之氏より、以下の話題提供をいただいた。

2.1 「聴覚障害とは？」群馬大学 金澤貴之氏

本ワークショップの実施にあたり、事前アンケートを行ったところ、それぞれがたくさんの「やっかいな」問題にぶつかっていることがわかった。これに答えるためには、一つ一つの問題について論じるよりも、その先にある「聴覚障害の本質的理解」に目を向けることが重要であると感じた。

一般的に「聴覚障害」というと、多くの先生方は「補聴器をつければ、少しは聞こえるのではないか？」と期待してしまう。けれども実際は多くの学生がおぼろげながら聞こえてきた音を元に、1日中必死に話の内容を類推しながら情報を紡いでいる現状にある。このため、家に帰る頃にはすっかり疲弊して、レポートを書けなかったり、翌日、疲れて起き上がれず、授業に遅れてしまったりすることもある。

また、口話を用いたやりとりでは、1対1の会話は成り立っても、複数人での会話は難しいことが多い。このため、同じ会話の輪に入っているにもかかわらず、自分に対して話かけられた言葉



以外はほとんど内容がわからず、何について話をしているのかわからないまま発言して、「その場の空気を壊してしまう」ことも少なくない。この結果、聴覚障害学生自身も集団での会話を避けるようになったり、一人でいる方が楽と感じたりしてしまう。ましてや支援者がいつも周りにいると、周囲からも話しかけづらい雰囲気ができてしまうので、結果として周りの学生とは必要最低限の情報のみをやりとりするだけの関係に終始してしまうことも少なくない。



図1 金澤氏
(写真)

みなさんにも想像してほしいが、そのような状況の中、授業のためだけに大学に行くのは、非常につまらないものである。もちろん授業に参加することは、大学生活の重要な一部分だが、それでも大学時代に楽しかった思い出を聞かれて、「〇〇概論」なんて授業名を挙げる学生はいないはず。このことから、大学生生活上、友人との関わりがいかに大切かがわかる。

しかも、聴覚障害学生にとっては、この生活が 365 日ずっと続くわけである。圧倒的多数の聴者の中で、一人ぼつんと聞こえない状態で。我々は往々にして、そんな大勢の聴者の中にいる聴覚障害学生と少し話をすることで、聴覚障害について理解したつもりになってしまう。けれども、その状態で我々に見えている世界は、聴覚障害のごく一部であって、こうした聴覚障害にまつわる問題の本質を理解しようと思ったら、圧倒的多数の聴覚障害者、それも手話話者の中に日常的に身を置くようなそんな体験をしなければいけないのだと思う。

同時に、我々はこのような環境の中で、聴覚障害学生に対して、社会性を身につけたり、空気を読んだりすることを要求する。しかし、この「空気」や「社会性」「場の雰囲気」というのは雑談の集合体のようなもので、インフォーマルな情報が入ってこない聴覚障害者にとって、いかに理解が難しいものかがよくわかる。特に、相手に察することを求める日本文化の中では、聴覚障害学生の行動は、時に常識外れとも映ってしまう。

例えば大学生活では、「あの授業は単位が取りやすい」とか、「次の試験は落ちたらまずいらしい」といった情報が暗黙のうちに交わされる。こうした情報は、教員に聞くのではなく、こっそりとやりとりすることが求められるものであるが、こうした慣習や空気が理解できない聴覚障害学生の中には、情報欲しさに先生に対して直接「この授業は簡単に単位が取れますか？」などと尋ねてしまうこともある。

けれども、こうした聴覚障害学生の問題は、周囲の人々には見えづらく、常識のない学生、せっかく支援をしているのにやる気がなくて不真面目な学生などという風に映ってしまう。こんな中、自分一人で情報保障をつけて授業を受け、誰とも話さず家に帰る、そんな生活を送っている聴覚障害学生の様子を想像すると、我々は聴覚障害学生支援の中で、これまでに何を解決してきて、何が解決できていないのか、改めて考える必要があると思う。

2.2 ディスカッション

金澤氏の話題提供のあと、改めて事前アンケートにて出された事例を取り上げ、議論を行った。

【事前アンケートにて出された事例】

- ・ノートテイクを配置している授業で、利用学生の遅刻・欠席が多くて困ってしまった。連絡もない状態だと支援学生の信頼を損なうこともあるからと伝えても「他の人にどう思われるかは気にしないタイプなので」との発言で対応に苦慮した。
- ・英語授業で元々ノートテイクを配置する予定だったが、支援者の手配ができるまでの間、担当の先生に詳しい資料を作成してもらっていたところ、利用学生から「資料で十分わかるのでやっぱりノートテイクは不要」と言われてしまった。
- ・ある授業でノートテイクを配置していたが、「ノートテイクがいると一生懸命見なきゃいけない。この授業は休憩のための時間だからノートテイクは不要」と言われ、結局ノートテイクをはずした。

フロア A／ノートテイクの配置について事例があがっていたが、合理的配慮の考え方からすると学生の意思表示がなければ配置は不要なのでは？

フロア B／もちろん本人の意思確認は重要だと思うが、基本的に大学として「このような情報保障ができます」ということを見せていくことも重要だと思っている。ただ、本学には通信制高校に通っていた学生も多く、基本的な授業の受け方が身についていない例も多いので、事例にあがっていたようなケースは多い。



図2 会場の様子（写真）

フロア C／本人による意思表示について、本学では以前たまたま支援がなかった場面があり、そのことについて学生に「支援がなかったけど大丈夫だった？」と聞いたところ「大丈夫でした」との回答が返ってきたことがあった。けれども、よく考えてみるとその学生も大学の事情を付度してあのような返事になったのだと思うし、「大丈夫じゃなかった」と言いだせる環境を作ってあげられていなかったことに反省した。意思表示を待つことも重要だが、学生の段階によっては「こういう場面でも支援をつけられるけどどう？」と意思を引き出していったり、それができる環境を整備したりしていくことも必要だと思う。

フロア A／なるほど。もう一つ、3つ目の事例について、支援を利用している学生には、できるだけ真面目に授業に出てほしいという思いはわかるが、障害学生だけが寝てはいけな



いとなると、ある意味、他の学生との公平性も問題になってくるのでは？

フロア B／本学でもノートテイクには、彼らの仕事として、利用学生が寝ていようと他のことをしていようと、支援をし続けるようにと指導している。それを利用するかしないかは障害学生の自由だと思うので。ただ、前述のように別の理由で授業態度が身についていない学生に対しては、教育上、寝ていると単位は取れないよということは指導している。

金澤氏／この問題、よく「寝る権利」などと言われたりするけれども、それを教員に向かって話している時点で社会性がないなと思う。冒頭にも話をしたが、本来、授業は聞くものであって、寝る権利などというものは声高に叫ぶものではないはず。なので、支援をするかしないか以前に、このような発言が出てくることに対して、きちんと指導をしなければいけない部分があると思う。

その上で、私自身も基本的には本人が遅刻しようが、授業中寝ていようが、ノートテイクには仕事だから役割を果たして欲しいと伝えているが、同時にその仕事を聴覚障害学生がずさんに扱っていると感じている時には、「人は仕事に対して単なる仕事以上に何かを求めているものだ」と伝えるようにしている。例えば、コンビニエンスストアでバイトをしていて、パンを買ったお客様が目の前でそのパンを捨ててしまったら店員は悲しい思いをするだろう。同じように、仕事だからお金がもらえればそれでいいというだけではなく、やはりその仕事の中で喜びを感じたいものだし、やってくれてありがとうという気持ちを期待して社会が成り立っているものだ。もちろん、だからと言って、聴覚障害学生にお礼を言うことを強要するものではないが。

いずれにしても、ここにあげられたような聴覚障害学生の問題を解決していこうと思ったら、やはりその学生の背景について丁寧にアセスメントをしていかなければいけないと思う。PEPNet-Japan ができて 10 年。この間、障害学生支援全体の取り組みを聴覚障害学生支援が牽引し、全国の支援体制を引き上げていった経緯があると思う。しかし、最近発達障害学生への支援が盛り上がり、そこに流れが変わろうとしている。実際、発達障害の世界を見てみると、一人ひとりの学生に丁寧に寄り添い、その状態に合わせて実にきめ細かな支援がなされている。翻って聴覚障害学生への支援を見ると、「聞こえない」という一言で片づけられ、情報保障のみで問題を解決しようとしてきた感がある。けれども、聴覚障害学生にも一人ひとりの背景があり、その理解なしには本当の支援はできないし、それをいかに細かく突き詰め、共通理解をして、情報発信をしてきたか？を再検討すべき時に来ているのではないかと思う。

3. 「教育の本質」と聴覚障害学生支援

後半の議論では、その場の教育目標と聴覚障害学生のニーズが拮抗する際の対応方法や考え方について議論を行った。ここでは、事前アンケートで寄せられた以下の事例を元に、

大阪大学中野氏より話題提供をいただき、これを元にディスカッションを行った。

【事前アンケートで寄せられた事例】

- ・外国語のリスニングや外国語の習得を目的とした授業では、どのような基準・方法で評価を行なっていくか難しさがあると感じる。教養系の英語であれば、リスニングを代替する方法で済む場合もあるが、外国語学部の聴覚障害学生では単に代替では済まされないため、支援の方法が難しい。
- ・資格取得のための実習における支援のあり方。求められる要件がたくさんある中で、どのように支援を行なっていくのが良いのか方向性を知りたい。

3.1 「外国語授業における支援の難しさ」 大阪大学 中野聡子氏

聴覚障害学生への支援を行っていると、教育目標や教育方法が聴覚障害の特性とぶつかって、どのように支援をしていくか方向性を定めるのが難しい時がある。ここでは、外国語の授業における支援を例に、本学でも対応に苦慮している事例を紹介したい。

外国語といってもいくつかのタイプがあるが、1つ目は、共通教育としての外国語におけるリスニングの事例。多くの大学では、4技能の一つとしてリスニングの授業が用意されている。聴覚障害があっても英語が聞き取れない場合、免除という選択肢が出てくると思うが、本学には大学院への進学が前提となっている学部があり、当該学生を含めほぼ全員が大学院への進学を希望しているケースがあった。この学部のディプロマポリシーには、「研究活動を通じて国外との学問的、人的、文化的交流ができること」と掲げられており、大学院では英語でゼミが行われていたり、国際学会等で発表が要求されたりする。



図3 中野氏
(写真)

この学部に入學してきた聴覚障害学生は、当初、英語の聞き取りは難しいためリスニング授業の免除・代替を希望していた。しかし、支援室としてもこれからそうした大学院に進学しようとしている学生に対して、単に免除をすることでいいのか議論になった。この場合、参考になるのは過去の支援事例だと思うが、当該学生はそれまで高校や大学入試等でもリスニングは免除されていた。これらの合理的配慮が正しいか否かという話ではないが、当該学部で求められる到達点を考えると、こうした配慮は合理的でないと考えられた。

一方、大学側の事情を見ると、マンツーマンで本人にとって必要な国際力を習得できるような指導をしたり、ASLの授業に代替したりといった対応も厳しい状況だった。このため、最終的には聴覚障害者にとってのリスニング能力を、速読を用いた即時的なコミュニケーション能力ととらえ、フラッシュカードやテロップによって英語の文字を提示して理解する方法に代替する形をとった。この結果、学部の先生方にも理解をいただき、必要な力の習得に至ったと考えられるが、学部のディプロマポリシーと本人の障害特性の両方の理解が要求される事例だったと思う。



二つ目の事例として、外国語学部における支援がある。本学は、大阪外語大学と合併したため、外国語の習得を目的とする学部があり、そこではコミュニケーションアプローチやタスク中心型授業が行われている。このため、英語を用いてやりとりをしながら英単語や文法を習得したり、ランダムに学生を指名しながら発言を求めたり、グループやペアを次々に変えながら、特定の設定に基づき会話をしたりするなどの指導法が用いられている。こうした指導環境は、難聴学生にはかなりハードルが高いが、いずれも第二言語習得研究の中で効果的と認められ、採用されている方法であり、これを大きく変更することは、一般学生にとっての教育機会損失となるため、非常に対応が難しいと感じた。

しかも、難聴の学生のために外国語をゆっくりはっきり話してもらおうと、上級レベルの学生にとって学習の妨げになってしまうため、こうした依頼もすることができず、非常に悩ましいと思う。これらの授業では、外国語の理解という認知的負荷のかかる環境で、かつ聞こえづらいというハンディが重なり、理解できなさが増強されてしまうため、表面に出てきた聴覚障害学生のパフォーマンスをどのように評価するかも難しく、対応に悩む結果となった。

3.2 ディスカッション

中野氏からの話題提供を受けて、以下の議論を行った。

フロア A／授業において特定の内容を免除・代替したり、合理的配慮を用意したりする際には、「社会に出たときにどのようなシチュエーションに置かれるか」を参考に決定する必要があるのでは？例えば、フィールドワークが求められる専門で社会に出たときに手話通訳等がないのであれば、それは同様の環境で学習すべきだと思うし、大学院に進学を予定して、そこで合理的配慮があるのなら、同様に配慮をつければよいと思う。

中野氏／確かにそういう側面はあるかもしれないが、社会といったときに聴覚障害者が活躍する社会がどんな状況にあるのかを知ることが重要だと思う。例えば、聴覚障害学生が将来的に国際学会等でグローバルに活躍することを考えた場合、アメリカの学会等では依頼すれば情報保障が配置されるのが普通だし、テレビ等にも字幕がついていて、文字から情報を得る環境が用意されている。それであれば、「聞く」の代替手段として字幕などを「速読」することが求められるし、それに応じた支援手段を提供することが合理的となる。実際に本学でもこのような形で学部の先生方に説明をしている。

金澤氏／私も同感で、社会といったときに「どういう社会を想定するか？」も重要だと思う。よく、重度の聴覚障害学生が看護系の学部などに入ると、「将来、看護師になれるのか？」といった議論が起こる。ここで専門の先生方が想定しているのは、往々にして非常に忙しい総合病院の現場で、外科や内科などさまざまな診療場面にオールマイティに対応できる看護師だと思う。けれども、それが大きな耳鼻科であれば、かなり負荷が軽減されるだろう。

うし、看護師ではなく保健師だったら 1 対 1 で対応することが多いので、活躍できる場面はより広がる。さらに言うと聾学校の保健の先生であれば、むしろ聴覚障害の先生の方が有利なわけで、社会的にも必要とされているはず。

ちなみに、本学でも附属小学校で教育実習を受けた聴覚障害学生がいて、彼女は手話通訳を使って実習を行った。もちろん、先生方の中には「将来、学校の先生になったら通訳なんてつかないのだから」と言う方もいたが、本人は聾学校の先生になることを希望していて、基礎免許の取得のために小学校での実習が必要だった。加えて、聴覚障害学生の場合、聾学校での実習に振り替えることもできたが、附属小学校は教育のスペシャリストが集まっている学校なので、そこでの実習を体験させたいという思いもあった。このため、実習先での指導を十分に吸収できるように手話通訳を配置する形をとった。

このように考えると、「想定する社会がどこなのか？」ということが重要だし、その社会のあり方も既存の枠を超えて、幅広く考えていかなければいけないと思う。

司会／参考までに、文部科学省「障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第二次まとめ）」の中では、こうした本質的変更に関する問題として以下のように記述されている。

障害のある学生に提供する教育については、(中略)本質は変えることなく、提供方法を調整するとともに、授業内容や教科書、資料等へのアクセシビリティを確保することで、全ての学生が同等の条件で学べるようにすることが重要である。また、(卒業後の) 資格取得や就職に関するものなど、教育の本質とは異なる付随的要件を理由に評価されることは避けなければならない。

このうち、最後の一文はまさに「就職したら通訳はつかないから、大学でも通訳なしで学んでもらわない」という論理に対して異を唱えるために追加されたものである。ここでは、就職後に想定される職場環境や資格の取得可能性といった問題は「本質とは異なる付随的要件」であって、それらを根拠に合理的配慮の内容を決定することは避けなければならないとされている点で注意が必要。

この背景には、実際に就職して働く段階と大学の学習過程は、連続的に繋がってはいるものの、目的も機能も異なるものであり、切り分けて考えるべきとの考え方がある。例えば医学部の実習生には、実習期間中、スーパーバイザーがついて、何らかの指導がなされる。これは、実習生がまだ教育段階にある学生であって、現場の医師よりも手厚い指導が必要だからだろう。同様に、まだ学習段階にある障害学生は、周囲で何が起きているか想像もできない中で学んでいる状況にあり、病院という現場がどのような場所かを知り、適切な行動がとれるように学習するのが実習の目的であるならば、そこに通訳をつけるなどの手厚い支援を行うことも理にかなっていると思う。こう考えると「将来、通訳はつかないのだから」という指摘の中では、本来、実習で学習すべき本質が見失われている点に注意をしたい。



フロア A／なるほど。ただ、例えば本学には車いすを使用している学生で、上肢・下肢ともに自由に動かすことのできない学生がいる。ところが、その学生が在籍している医学部は、ディプロマポリシーとして「将来、医師として働くのに耐える知識と態度・技能を習得していること」と書かれていて、これを遵守しようと思うと、この学生は永遠に卒業できないことになってしまう。特に医学部の場合、4年次と6年次でそれぞれ実技試験があり、これらへの合格が必須になってくるし、その学生も研究者ではなく医師を目指して入学してきている。こうしたケースの場合、ポリシーを変えてしまうしか方法はないのか？

フロア B／こうしたケースの場合、その科目ができるかどうかという見方だけでなく、もう少し視点を広げて、カリキュラム全体の中で本質的な能力が習得できているかを考えるべきだと思う。例えば、一般教養の英語の場合、リスニング自体ができるかどうかは重要ではなく、国際的に活躍するために必要な素地を身に付けられたかが重要なはずで、英語に限らず多様な言語や文化が学習できれば、それで要件を満たしたことになる。こう考えると、医学部の実技についても、もっと別のやり方で、広い意味で必要な技能を習得したと考えることはできないのかなと思う。同時に、特定の科目要件が満たせなくて、目標としている資格の取得にたどり着けないケースに対応するために、大学としては「ゼロ免課程」のようなコースも用意していく必要があると思う。

司会／前半で話のあった点は、まさに「今、本質と考えられているものは、本当に本質的なのか？」という議論になると思う。例えば、日本でも脊髄損傷で首から下が動かない方で、現行の医師免許を取得されている先生もいるし、聴覚障害者で手話通訳をつけながら病院で働いている医師もいる。さらに海外に目を向けてみると、さまざまな障害のある人たちが我々には想像もつかないような方法で医師として活躍している例がある。そう考えると、我々が「全体に必要」と思っている技術は、実は周辺的な能力でしかなくて、本質的な能力はもっと別のところにあるのではないかと感じさせられる。

実は医学系の OSCE 試験などは、既にこうした考え方に対応していて、自分の手で実技ができなくても、介助者に指示を出して聴診器をあててもらったり、通訳者を介して問診をしたりする形であっても、患者様に不快な思いをさせずに診断や治療に必要な情報が得られていれば、本質的な能力を有しているにとらえ、合格としている例がある。このため、必要な技能といった場合に、もっと幅広い解釈ができないものか、学内でも、また試験の実施機関とも議論をしてみることをお勧めしたい。

金澤氏／同様に現行の制度や体制の中でできないことがあるのだとしたら、それは制度や体制を変えていくことも大学の役割の一つだと思う。例えば、今、手話通訳を使いながら働いているろう者が日本にほとんどいないのであれば、それができる環境を作るのも我々の役目であって、前例がないならこそ開拓していく気持ちで取り組みたいと思う。

4. 到達点と課題

本ワークショップでは、「聴覚障害の本質」と「教育の本質」の2つのテーマを軸に、現在の聴覚障害学生支援における課題と求められる取り組みについてディスカッションを行った。この中では、我々、障害学生支援関係者が理解すべき問題について、深く議論ができたほか、今後 PEPNet・Japan が担っていくべき役割についても一部明らかにすることができた。聴覚障害学生への支援は、まだ緒についたばかりであり、今後解決すべき課題は無数にある。このことが確認できたことが、本ワークショップの何よりの成果だと思われる。今後、こうした認識を全国の大学と共有していくためにも、継続的な議論が求められている。



早稲田大学キャンパスツアー

磯田恭子¹⁾

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター¹⁾

1. はじめに

今回の会場となった早稲田大学は、130年以上の歴史と伝統のある大学である。キャンパス内には国の重要文化財として指定を受けている大隈講堂、大隈銅像などとともに、最新の建造物もあり、バリアフリー化も進められている。本企画では、早稲田大学の協力を得て学生ガイドによる案内付ツアーを、2回の時間帯を設けて実施した。

2. 内容

実施にあたっては、手話通訳ならびに「モバイル型遠隔情報保障システム」を活用した文字通訳の配置を行い、情報保障支援の利用希望者にも参加頂ける体制で実施した。また、1つの時間枠は通常60分のルートを90分かけてゆっくり回るコースを設け、移動に困難のある方にも参加して頂きやすいようにした。

学生ガイドの快活な説明を受けながら、大隈講堂・大隈銅像・坪内逍遙記念演劇博物館などの主要なみどころを見学した。

さらにタイミングが良かった回では、大隈講堂のシンボルでもある時計台内部を特別に見ることもでき、参加者からも驚きの声が上がっていた。早稲田大学障がい学生支援室のある3号館は特に印象的な建物であり、旧校舎の趣きを再現したエントランスを入ると、先進的な空間が広がっていた。障がい学生支援室の見学も兼ねて拝見することができた。参加者は38名とあまり多くなかったが、先進的な設備とバリアフリー状況などを実際に見ることで、学ぶことが多かったと思う。

次年度以降も、実施可能な場合には広く参加を呼びかけて開催する方向で検討して行きたい。



図1 学生ガイドによる説明の様子
(写真)



図2 見学の様子
(写真)

**聴覚障害学生支援に関する
実践事例コンテスト 2018
受賞ポスター**



早稲田大学障がい学生支援室

4年生

就活、卒論…



支援室でできた
友達に相談できる

障がい学生の声

「支援室のおかげで
安心・充実した学生生活
を送れている」

「支援室は心の拠り所」
「学生との交流も深まる」

卒業
おめでとう！

支援学生の
面談

「僕の支援、
ちゃんとできて
いるのかなあ？」

「授業中に
障がい学生が
寝ちゃった…」

ゼミが始まる

ディスカッションが
増えたので
手話通訳を依頼

3年生

新歓
活動



YORISOI

大学生活に寄り添う支援

2年生

オンデマンド



字幕挿入を
依頼

手話講座

週一回
支援室で開催

交流会



普段あまり
話さない人とも
話ができた。

講義

パソコン
通訳

語学

記録

授業

パソコン通訳
記録
手話通訳
文字起こし
字幕挿入

1年生

入学前
支援室と面談

合格

問い合わせ先
早稲田大学 スチューデントダイバーシティセンター 障がい学生支援室
TEL:03-5286-3747 FAX:03-5286-0642 E-mail: shienshitsu@list.waseda.jp


WEBサイト


Facebook


Twitter

宮城教育大学しょうがい学生支援室

TEL・FAX : 022-214-3651 E-mail : csd@adm.miyakyo-u.ac.jp

見えないものと向き合う

今まで目を背けてきた課題。それは、利用学生、支援学生、運営スタッフが抱えている言えずにいた悩みだった。これらを解決するために皆で課題と向き合い、活動を考え、積み重ねてきたことを伝えたい。

練習会

基礎編…テイクの基本を身につけたり、支援学生の悩みや不安を聞いたりする。
4月…派遣前のテイク術伝授
5月…支援学生の悩みに合わせた練習

応用編…実際の講義を想定した練習をしてテイク技術の向上を図り、利用学生の困難について参加者全員で考える。
6月…先生と学生のやりとりのある講義
7月…ディスカッション

手話学び会

利用学生と支援学生の
コミュニケーションを増やすため

テイクの中で使える手話!

- ・1回目は…
合宿での利用学生3人による
おもしろい劇を通して、楽しく覚えられた。
- ・2回目以降も…
お互いが楽しく覚えられ企画を
考えていく。

共に悩み共に作り上げる
今までを越えるテイク

合宿

ディスカッション
～きこえない体験～

・ディスカッション時の情報保障の
限界を知る。

・必要なテイクの方法を
一緒に考える。

利用学生の悩みに対する検討

・利用学生の悩みを受けて支援学生の
悩みまで、話し合うことができた。

学生時代に知っておきたい法制度

～若林亮氏による公開講座～

PR活動

例年よりも、コースの
特色に合わせてPRを
行った。

顔合わせ会

今年は30人程が
参加し、ゲームを通して
盛り上がった。

芋煮会

今年は手話学び会の
企画を入れて、
交流を深める。



利用学生

- ・テイクをしてもらえてありがたい
けど、悩みはある。
- ・申し訳なくて言えない。
- ・関係が深まっていないのに、
本音は言えない。

運営スタッフ

- ・昨年度は練習会参加者0
だった日もあり、イベント
や練習会に人が参加しない。
- ・そもそもPRに欠けていた。

支援学生

- ・利用学生とのかかわり方が
分からない。
(手話できないし…)
- ・(かかわる機会が少ないし…)
- ・テイクをちゃんとできているか
不安。(技術面)
- ・ペアテイクーとのかかわりが少ない。



大阪教育大学
OSAKA KYOIKU UNIVERSITY

障がい学生修学支援ルーム

E-mail: sienroom@bur.osaka-kyoiku.ac.jp

TEL:072-978-3479

これから
欲しい！

手話わいわい
昼休みに手話で
おしゃべり！

模擬授業
テイクの
実践練習を
したい！

ルーム定着大作戦！

～様々な企画を通してルームを活性化させよう～

利用学生も支援に
ついて知ろう！

スキル認定

利用学生
講座

学生企画
新歓・交流会など

特待生
少人数の
テイク講座！

手話講座
手話の楽しさを
知ろう！

広報

ずっと
続けたい！

北星学園大学 Note Takers

北星学園大学アクセシビリティ支援室

〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2丁目3番1号

電話：011-891-2731(代表)

E-mail: acc-support@hokusei.ac.jp

「向上心」

一人一人が講習会や自主練習で実力を上げ、アンケート調査や利用学生体験を実施し、客観的な視点も大切にしています。

「多様性」

ニーズに応えるため、モニター導入他パソコン手書きテイクでの六言語対応や補聴援助システムなどの活用をしています。

「コミュニケーション」

報告会や手話講習会を通じて、和気あいあいと話しやすい環境で活動しています。

「業績」

日頃の活動が評価され、北星学園大学賞を受賞しました。認知も高まり、利用学生も増えています。

命の危険にさらされたアリオンが得意な楽器を奏でると、イルカが集まってきて命を助めました。

ノートテイカーは利用学生の思いにより添い、頼りになる存在であり続けることを「いるか座」を用いて表現しました。



札幌学院大学

～テイクで繋がる道東との絆～

学生による他大学のテイカー育成支援

北見工業大学の学生向けパソコンテイク講習会開催事例

北見工業大学では2018年度から聴覚障害学生が1名入学

●講習 第1回 講師学生を派遣

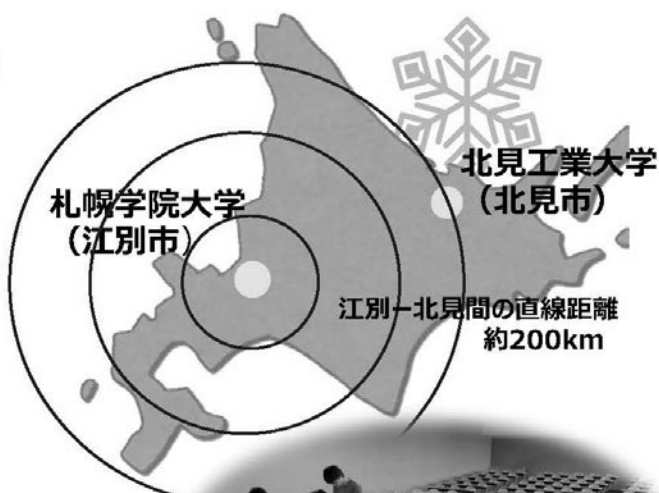
- ・実施期間：2018年2月22日～2月23日
- ・実施場所：北見工業大学
- ・講師学生：4名
- ・受講学生：6名

●講習 第2回 受講学生が来学

- ・実施期間：2018年9月20日～9月21日
- ・実施場所：札幌学院大学
- ・講師学生：4名
- ・受講学生：4名

●学生による講習会

- ・講習会の教材作成
 - ・講習担当者の役割分担
 - ・実施スケジュールの作成
 - ・当日の講師
- をすべて学生が行っている



第2回講習の様子
『これで君もテイカーだ!』



連携入力の練習



入力結果の振り返り

講師学生と受講学生

学生の講師

連絡先 札幌学院大学サポートセンター(e-mail:shien@ims.sgu.ac.jp)

第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 実行委員

大会長	筑波技術大学	学長	大越 教夫
実行委員長	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター センター長	佐藤 正幸
事務局長	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター 准教授	白澤 麻弓
幹事	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター 助手	磯田 恭子
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター 助手	中島亜紀子
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター 助手	萩原 彩子
実行委員	早稲田大学	スチューデントダイバーシティセンター長	三神 弘子
	早稲田大学	障がい学生支援室 課長	大久保裕子
	早稲田大学	障がい学生支援室 専任職員	黒田 泰
	早稲田大学	障がい学生支援室 常勤嘱託職員	志磨村早紀
	小田原短期大学／ 早稲田大学	講師／招聘研究員	杉中 拓央
	東京大学	バリアフリー支援室 特任助教	中津 真美
	日本社会事業大学	教授	斉藤くるみ
	関東聴覚障害学生サポートセンター	コーディネーター	山本 篤
	関東聴覚障害学生サポートセンター	コーディネーター	田中 啓行
	宮城教育大学	教育学部 准教授	松崎 丈
	群馬大学	教育学部 教授	金澤 貴之
	筑波技術大学	副学長	石原 保志
	筑波技術大学	聴覚障害系支援課 課長	小暮 聡子
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター 教授	三好 茂樹
	筑波技術大学	産業技術学部 教授	谷 貴幸
	筑波技術大学	産業技術学部 准教授	井上 正之
	筑波技術大学	産業技術学部 准教授	河野 純大
	筑波技術大学	産業技術学部 講師	守屋誠太郎
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター 特任研究員	石野麻衣子
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター 技術補佐員	吉田 未来
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター 技術補佐員	坂井 肇

(所属はシンポジウム実施当時)

日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム報告書 第1号
「これからの聴覚障害学生支援—今『対話』を考える—」
(第14回 於：早稲田大学)

発行：第14回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム実行委員会

発行日：2019年3月20日

編集：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）事務局
〒305-8520 茨城県つくば市天久保4-3-15

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター

※本事業は、筑波技術大学「聴覚障害学生支援・大学間
コラボレーションスキーム事業」の活動の一部です。



日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム報告書（第14回 於：早稲田大学）



国立大学法人

筑波技術大学

PEPNet-Japan

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク